

370

プリントアウトした請求票は、所蔵部署階のカウンターにお持ちください

111年06月07日 11:41:47

111年06月07日 11:41:47

入館証番号:

[Empty box for library card number]

入館証番号:

[Empty box for library card number]

Call Slip

<請求票>

302.2
5027
1938

Call Slip

<請求票>(控)

資料名: 支那と支那人と日本  
 巻次:  
 著者名: 杉山平助 || 著  
 出版者: 改造社 頁数: 432p 函  
 大きさ: 20cm 出版年: 1938.5

書名  
 資料名: 支那と支那人と日本  
 巻次:  
 著者名: 杉山平助 || 著  
 出版者: 改造社  
 出版年: 1938.5  
 大きさ: 20cm  
 頁数: 432p 函版5枚

切り取り

所蔵館: 中央  
 所蔵部署: 1階資料お渡し・返却カウンター  
 配置場所: 1/66B 中)B1書庫B  
 資料ID: 5000069086

所蔵館: 中央  
 所蔵部署: 1階資料お渡し・返却カウンター  
 配置場所: 1/66B 中)B1書庫B  
 資料ID: 5000069086

請求記号
302.2
5027
1938

一社人自東新	力	事
↓		
一社人自東新	請求	報告
MB1 マイコ	B1 アルファベット	原紙 縮刷
MB2 マイコ	B2 洋	中 朝
行	IF B1 B2	
多	児 青 IF B1 B2	

## 戦線から歸つて

### 1

一九三八年の元旦を、私は揚子江の江上で迎へた。私をのせた軍用船××丸は、大晦日の朝、南京の下關から錨を抜いて、其日の夕方は、江陰に投錨した。敷設水雷やらその他の危険があつて、この河筋の夜間の航行は、絶対に禁ぜられてゐたからである。

元旦の未明、顔を洗つて甲板へ出てみると、空は珍しいほど暗れ渡つて、船は微風の中を静かに走つてゐた。

右岸には、江陰の砲台が見えた。また、支那軍が、この河筋を閉塞するために沈めた、十數隻の船のマストや、煙突の突端などが、河波に洗はれてゐるのが見えた。

をりしも、まつ赤なまん圓い初日の出が、播鉢型の山の肩から昇りはじめた。その播鉢型の山の頂上には、海軍の大きな占領旗が、へんぼんとして朝風に靡いてゐる。

もし、尋常小學六年ぐらゐの生徒に「戦勝の新年」といふ題で圖畫を描かしたら、百人中の五十人までが思ひつくであらうと思はれるやうな圖柄を、そつくりそのまゝ、現實として眼のあたりに見る不思議さに、私は内心に驚いてゐた。

しかし、そのために、これは非出度い、今年は運がいゝたらうなどといふ常識的な氣もちになることは、私には、全く出来なかつた。南京で見て來たさまざまな光景は、あまりに痛く私の腦裡に焼きつけられてゐた。私の感情はむしろ沈鬱であつた。

日本の將來の多難な艱苦のみが、私の念頭にいつばいであつた。

小雨のそほ降る日に、支那人の死骸がツクダニのやうに折り重なつた南京の城壁のほとりを、ひとり靜かに歩いて行つた時、「夢かや、うつゝかや」といふ古い物語にあるやうな文句が、そのまゝ私の胸によみがへつて來たことも思ひ出された。

これは夢であらうか、うつゝであらうか。

もし、一九三七年の初頭に、何人か、今年の年末に、日本軍は南京に入城してゐるであらうと豫言したら、世界中の何人も、彼を荒唐無稽の浮説をなすものとして、一笑に附したであらう。

しかし、到底起り得べからざる事と思はれることが、現實には、實に易々と簡単に生じ得るのである。

孫文の理想も蔣介石の霸業も今いつこ。南京城内外、鬼哭啾々たるの恨みを、私は耳に聞いたのだ。この老廢しつゝある民族を、血清の注射によつて蘇らせようとした新生活運動の本據たる勵志社の建物の、破屋のごとく投げ捨てられてゐるのも、私は見たのである。

いつれにせよ、近代支那廿年の辛苦を、一朝にして水の泡と歸せしめ、無数の生民に恐ぶべからざる痛苦を嘗めさせたことを思ふ時、現代支那の指導者たちの、何たるたはけた、誤つた指導ぶりであらう、といふことが、實に地團駄を踏みたいやうな氣もちで、慨嘆されるのである。

これは善惡の問題ではなくて、現實の問題である。國民政府當局が、どんな筋の立つた理窟をいはうとも、無辜の生民の受けたこの現實の慘害は、もはやつくなふことは出来はしないのだ。

それにつけても、私は、日本を憂ふる。かゝることの生じ得るとは信ずべからざるが、日本に對しても、實に易々と簡単に生じ得ることも、考へて見なければなるまい。思ひもかけない狂瀾怒濤が、我々の生活の前途に待ち構へてゐないとは、何人も斷言は出来ない。南京に起つたやうなことが、大阪に、東京に、起らないとは誰が保證し得よう。

私の上海滞在の期間は短かつたけれど、その間に、國際情勢の油断すべからざることは直感した。そして、我々の生活は、根本から建て直されなければならない、といふ決意をもつて、私は日本へ歸つて來たのである。

歸つてみれば、郊外の私の家の、庭の枯れた芝生には、うらやかに陽が照つてゐる。フリージアは靜かに匂つてゐる。ピアノの音も、どこからか聞えて來る。何といふ平和さであらう！

しかし、私は、もうこの平和さを信ずることは出來ない。南京の印象は、あまりに強烈だ。私の心はレストレスである。不安である。

私は、この不安を人々の心につたへ、彼等の決意を呼び醒さなければならない。戦争が好ましいか好ましからざるかは別の問題だ。ひとたび戦争をはじめた以上は、絶対に負けてはならない。そしてそれは、指の一本も動かすことなくして、出來ることではないことが、私にはハッキリ分つたのだ。

## 2

自ら戦つたものとしての興奮を味はず、冷靜な一人の視察者として、敗戦にうちのめされた慘

6

憐たる南京の實景を見たものは、いつかは日本も、これと同じやうな地獄苦を味はせられることがなければよいが、と憂ひをいだくのが、十人のうち七八人までのことであるらしい。

人間の心理には、常にバランスを變ずる傾向がある。

強く敵をうち負かした者は、その刹那に、自己の敗北の日を思ふことが、正常な心理なのである。「勝つて兜の緒をしめよ」といふ心がけは、この心理の所有者にして、はじめて生じ得るものなのだ。

さらに、我々日本人の精神には、その意識するとせざるにかゝはず、佛教思想によつて影響せられた、一種の因果觀が内在する。人に加へたものは、いつかはめぐりめぐつて自己の頭上にもどつて來はせぬかといふ攝理の威嚇が、無意識的に内在する。

さうして、日本人の大多數は、これあるがために、大きな悪いことも出來ず、消極的には巨大な雄飛者の素質を失ひがちになる。しかし同時に、それあるがために、常に民族として中道を踏みはずさず、蹉跌のすくない健全な發達をも遂げて來たのである。

全日本の民衆に、上海から南京にいたるまでの、砲火に潰滅した都市村落の有様を、見せてやりたい。支那民衆の痛苦と恐怖のさまを見せてやりたい。敗戦とは、如何にみじめなものである

7

かを、骨身にしみこむほど知らせてやりたい。それは、大震災などの比ではないのである。

戦争を好ましいものだと考へるものは、世の中にあるまい。あれば少数の例外人である。それは敵を殺すとともに、味方をも殺すことなのだ。無数の母や妻を、泣きの涙に濡らせることなのだ。避けられるだけは避けたいものである。

現に、私の如きも、事變の當初に、大風の中に蚊の鳴くやうな細い聲ではあるけれど、片隅から、執拗に不擴大主義を主張した一人である。

しかし、我々の如何なる空頼みにもかゝらず、現實において、ひとたび火蓋が切つて放たれたからには、問題は別だ。

我々は、今こそ鬼のごとく、徹底的に戦つて、徹底的に勝つより外はない。そして、勝つためには、且つその戦果を確保するためには、如何なる手段といへど、辭すべきではないのである。この期に至つて、中途半端の温情主義や人道主義などは、百害あつて一利がない。

「如何なる手段も辭すべきではない」といふこの言葉は、敵に對して云はれるとともに、また味方に對しても云はれなければならぬ。

そのために、前線の指揮官たちは、心を鬼にして、愛する部下を必死の境地に進めるのだ。同

8

じやうに内地にゐるわれくも、何等かの犠牲を拂ふのでなければ、あまりにバランスがとれなさすぎる。

9

今後、私の所得の大半をもぎとられるやうな重税を負はせられようとも、戦争のつゞいてゐる限りは、一言半句の文句も云ふまい、といふ覺悟をいたして、私は戦地から歸つて來た。重税が何であらう。戦争に負けた場合の、あの痛苦と屈辱に比較すれば、どんな重税にせよものゝ數ではないのである。

癪に障ることも、山ほどないではないが、今は云はない。

まことに冷靜に考へてみて、日本の前途は容易ではないやうだ。相手が支那ひとりなら、鼻唄をうたつてもやつて行けようが、國際關係の微妙な動向は、私のやうな小心者をして、日夜ハラハラして、食事の味を失はしめるほどのものがある。爲政者の細心と、剛膽と、國民の現實認識の痛烈さを要すること、今日より甚だしきはない。

この際、何より大切なのは、日本國內を分裂させてはならないといふことだ。我々は、如何なる手段をとつても、日本國內から敗北主義者を一掃せねばならぬ。

支那各地の慘狀を目撃するにつけ、支那の民衆に、かゝる慘害を蒙らせた主要な原因の一つ

は、共産派の敗北主義であるといふことを、私は考へてみた。そして、何千年か先に實現せられるのか分りもしない概念的な理想を追うて、現實の民衆を、こんな見るに忍びない悲慘な有様に陥れた馬鹿者共奴が！ といふ憤りに近い感慨が、胸に迸つたのであつた。

## 歸 來 感 あり

### 1 現下に於ける對内的の問題

支那から歸つてから、誰かれとなく時局を論じてみると、その後で必ず頭痛がしてくるのが、近頃のきまりである。

どうも、ひと通りまづい味である。その味のまづさは、國外問題とともに、國內問題にからまるところがある。

あけくの果ては、嘆息であり、どうにかなるたらう、といふ神頼みであり、どうにかなるさ、これくらゐのものを、大日本帝國が乗り切れないでどうするか、と力味かへつて、感傷ることになるのである。

國家の前途を憂ふる、などといふことは、私たちインテリゲンチヤは、何れかきまりが悪くて、口に出さないところがあつた。しかし近來の私は、それが實感として心配になつて來た。特

に、自分に子供が出来てから、その傾向が強くなつて来たやうだ。

世間の親たちは、入學試験のこととか、どこの大學へ入れようかとかを心配してゐるが、そもそも日本といふ國が潰れてしまつたら、入學試験もへツククレもあつたものではないのである。

自分たちの子供が通辯か何かになつて、毛唐の鼻息をうかがひ「あれがフヂノヤマでありますし」などと、案内なんかして暮すより外に道がなくなつたらどうだらう。一部の馬鹿者共は、さうなつたら赤化國になつて、ソヴェトがうまくとり計つてくれるだらうなどと考へてゐるむきもあるが知れないが、私など、嘗つていかなるマルクス主義全盛時代にも、そんな甘ちよろい丁桶になつたことは一瞬間といへどもない。

今度はまた、眼のあたり、觀念にのみとらはれて、外國に頼つた支那の、みじめきはまるザマをつくつくと眺めて来たのである。

たゞ、何より必要なのは、日本の内部の統一だ。それさへ強固なら、或る程度の外部の脅威は、却て一種の刺戟劑として歓迎してもいい。

ところが、内部の各機關に摩擦があれば、如何なる俊敏な外交官があつて、如何なる妙手をうたんとしても、これを妨げるものが、内部に生じるのだから、まるで舵のきかなくなつた船み

12

たいに、右に左にと、漂つてゆくより外はないのだ。いはんや、外交が、正視に恐びない貧困をしめしてゐる時代においてをやである。

現在の日本が、さうなつてゐるとは云はぬ。たゞ過去には、いくぶんさういふ憂ひがあるやうに見えた。

かうした状態を打開して、議會における強ひられたる全員一致といふやうな形式的なものではなく、全日本が内部から盛上つて来る結合に到達するには、いつたいどうしたらいいのだらう。

これがいはゆる今日の精神的總動員の問題だ。

私は、端的に云ふが、やはりインテリゲンチヤの魂をつかまなければワソであると思ふ。インテリは弱いものである。それ自體においては、何等の力のないものゝやうにも見える。しかしその弱さのために、はかるべからざる力を具へてゐるのだ。それは、まるで女みたいなものだ。女自體には、一見しては、何の力もないやうに見えるが、女の動き出さないやうな社會運動は、意味をなさないのと甚だよく似てゐる。

頭ごなしの力づくや、威嚇などによつて、その魂がつかめるものではないことも、よく似てゐる。無理な眞似をすれば、その場は押し通せても後日に必ず社會に歪みが生じるにきまつてゐ

13

る。我々の苦慮するところは、そのあたりにある。

## 2 現下に於ける對外的の問題

國內問題と共に、國外問題がまた、相當に私に頭痛を興へてくれる。

日本が現在、國際的にきほめてテリケートな地位に立つてゐるといふことは、すこしくさとい眼で現實を見つめてゐるものゝ、骨髄的な實感でなければなるまい。

しかし、この危局を突破するのでなければ、新しい日本はつひに生れないのだと思へば、泣きつ面をするかばりに、百倍の勇氣を鼓するより外はない。

自狀するが、我々短見なる批評家は、事變の見通しについて、たしかに誤りを犯してゐた。

戦争のはじめに、國際的に決定的に重要なのは、南の戦線だといふことはわかつてゐた。そこで上海への出兵ぶりの、チドリチドリと、しみつたれが金を出すやうなやり口を、私などは、甚だ齒痒がつた一人である。

南京を叩く迄もなく、南京と上海の連絡を断つて、南京城下をしめつけば、すでに國民黨と共產派は分裂して、クーデターの機先を争ふ愉快な光景が見られるであらうと、私は豫想し、且

44

つそれを筆にもした。同じやうな考へ方をしてゐた政治評論の大家も、そこらにウヨウヨゐる筈である。

45

然し、事實は、その通りにはならなかつた。國民政府は分裂せず、そのまゝ漢口に退却して、長期折戦を宣言した時は、正直に云つて、私は、何ともいへない厭な氣がした。自分の短見に舌うちしたのである。

この私の錯誤の原因には、支那における共產派の實力を大きく買ひすぎた點もある。國民政府の三に對して一くらゐのところだと思つてゐたが、事實ははるかに無力であつた。それに加ふるにその指導者たちの控へ目な、おそろしく用意周到なやり口がある。現在ソヴェトの外交界のスタッフの優秀さは、世界第一と考へてよいであらうが、その連中が共產派を通じて支那をあやつる手腕の微妙にして、強靱且つ忍耐強いことは、實に舌を捲かせられるものがある。我々は、この手を逆ねちになければならぬ。

現在の日本は、英國及びソヴェトの陥穽にはまつて、支那などを相手に、國力を消耗させられてゐるのではないかと心配するむきもある。さうした趣きも、見えないことはない。しかし、外交上に、さうマンマと丸勝ちといふものがあるわけのものではない。日本も失ふところがある

かはり、英國及びソヴェトも、相當に痛いところを突かれてゐると考へるべきが常識だ。

まさか半年もたないうちに、北支の大半、及び上海から南京まで席捲されようとは、さすがに彼等も考へなかつたに相違ない。それは南京が陥ちた瞬間に、上海在留の英國人がしめしたシヨックが、よく物語つてゐるのである。

我々は、この痛いところを、もつともつと突かなければならぬ。國民政府も弱つてゐる。英國も手をやかないことはない。この際、機を逸せず、廣東をうつべきは當然のことである。

英國の一般評論界は、日本が北支においてあくまで戦ふのは、死活の問題として認めるとするも、單なる利害の問題にすぎない南支では、すこしやりすぎはしないかといふ、甚だ御親切らしい忠告を興へてくれてゐるやうである。

だが、われ／＼はその忠告を、そのままつくり返す。やりすぎるのは諸君の方である。諸君の火いたつらも、あまりに度がすぎると、火の粉は諸君の顔に入ネかへることを、もうソロソロ考へておいてよいのではないか。世界大戦から、いつたい英國は何を得たか。近頃の日本には、排英論者が多いやうである。私はそれと反して、英國と提携すべし、といふ意見をいだいて歸つて來ただけに、この際これを切言するものである。

16

### 3 インテリゲンチヤの問題

17

去年頃から、文壇小説に對する私の興味は、著るしく低下しつゝあつた。文藝時評となんいへる役割を擔當させられることに、私は、葬式の旗持ちを命じられるほど恐れをなして、何とか口實をつけては逃げ廻つたものである。

私の話相手は、文學者より、政論家や經濟人の方が多くなり、私は方々の俱樂部や事務室で、好んで國策を論ずるやうになつてゐた。

つい先頃も、蘇峰老人をつかまへて、一議論まくしたてゝゐると、

「杉山さん、あなたなぞ、ツマラナイ小説の批評なんかやめて、これから大いに日本のことを心配してくださいよ」と勸告されたものである。

「ツマラナイ小説の批評なんか」と云はれると、私も、いさゝか神経が傷つけられる。私は、それほど輕薄な人間ではないから、今さら、文學を輕んずるやうな氣もちも毛頭ない。

天下國家を論ずるのが偉さうなことで、男女愛慾の痴情を分析するのがつまらないことだなどといふ粗雑な錯覺からは、完全に脱却してゐるつもりである。この二つのものは緊密に結びつい

て、離れがなきものなのである。

むしろ、今日の政論家の所論の多くが、深刻性を欠いて、甘つたるいのは、彼等が本當に文學を理解し得ないためであると信じてゐる。

併しながら、一部の文學者に見られるやうに、我々が事變を論じ、國策を論ずると、直にこれをもつてデヤアナリスティックな輕薄さとして、眉をひそめるが如きをも、迂愚度しがなき半可通として蔑視してゐることも事實である。

時代に觸れずして、何の文學があらう。そして、我々は、眞に文學を愛するためには、しばしばこれを捨てなければならぬ。

ひと眼見て、今日の日本の文學の低迷し、インテリゲンチヤの萎縮してゐるさまは、明かである。白鳥や、荷風や、直哉などが、古色蒼然たる箱の中から、カドを拂つてかつぎ出されてゐる。

それは、北支政權の主席として、七十いくつの曹錕などが、話題にのほつてゐるのと、甚だよく似てゐる。一時の間にあはせにはいゝかも知れないが、いつまでもそのまゝでは困るのである。それはかつぎ出される御當人たちが、いちばんよく御承知のはずだ。

いつたい白鳥や荷風や直哉などといふ人々は、その文壇にデビューした基調や、その人の文學

を重からしめたものは、決して、國家的な思想ではなかつた。むしろその反對だ。日本のインテリゲンチヤを、今日のごとき「自由」なものにしたことについて、彼等の責は決して小さくはないのだ。

と云つて、私は、決して彼等の罪なんかを鳴らしてゐるものではない。文壇にまでスバイ政治は、お互にまつ平だ。日本の思想界が、わづかばかりの對立をも包含し切れぬやうでは、むしろ日本精神そのものをも傷つけるわけであらう。

この點で、彼等がたとひ思想的には爪の垢ほどの叛逆性をしめしたといへど、大局において、日本人の精神内容を豊富複雑にしたことを認め、國家的褒賞を授けることは、決して矛盾してをらぬと、私は考へるものである。

しかし、ただそれだけでは駄目なのだ。さらにこれを綜合し、新しい精神が生れなければ、意味はないのである。

その點で、今日のインテリゲンチヤは、全幅的に信賴のおける指導者を、未だ持つてゐないのである。その再検討、その精神の再組織が、單なる人ごとではなくて、差し迫つた自分のこととして、私など、今後の重要な仕事のひとつと數へたいと考へてゐる。

## 支那人を論ず

27

### 1 彼等を現實に直視せよ

日本は、戦争では、支那を完全に叩きのめした。今後といへども、支那が日本に勝てる見込みは絶対にあるまい。

しかし問題は、これで終つたのではないことは、誰でもが知つてゐる。今後、政治的に、經濟的に、支那を如何に處置しなければならないか、といふより至難なる問題が、日本に残されてゐるのである。

これに成功するためには、まづ支那民衆の心を得なければなるまい。即ち、文化工作をほどこして、これを宣撫することが重要だ。

これを重要でないと、云ふものはないであらう。しかし、それが可能か、或は如何なる手段方法によるべきかについては、百千の議論がわきおこりはせぬか。

日本軍が攻略した敵城へはいつて行くと、支那民衆は手に手に日章旗をたづさへて、これを迎へる。この連中にお粥の一杯も喰はしてやれば、嬉々としてたちまち日本人に懐くなんてことが、新聞にかいてある。

支那人を手なづけることが、そんなお手軽にゆくものなら、日本の外交が、今日のやうなみじめな状態に陥つてゐる筈は、絶対にないのである。

上は蔣介石や馮玉祥から、下は糊賣り婆さんから苦力に至る迄、支那人はつひに支那人だ。そんな子供に餌をしやぶらせるやうなやり口で、どうして動くわけがないではないか。萬々一、そんな甘ちよらい支那人観の上に、今後の政治經濟工作がうち立てられるならば、それこそ砂の上に家を建てるものである。たちまちにして崩壊し去るのは、眼に見えてゐる。黄土に眠る何萬人といふ貴重な生命の犠牲が、それでどうして済ばれようか。

軍人は劍をもつて支那人を撃つた。我々文化人は、ペンをもつて彼等の魂を抉り出し、これを的確なリアルなまゝに直視して、之に適應すべき最善の方法を示唆するの責任を擔當しなければならぬ。

支那に長くゐればゐるほど、支那人といふものを、むづかしく考へる傾向があるやうだ。

22

支那といふところは、考へれば考へるほどわからなくなつて來る。最初は支那人がわかつたと思つても、さらに少しく交際をつゞけてみると、更に又わからなくなる。彼等はつひに謎である、などといふのが、彼等支那通連中の常套語であるやうだ。

こんな勿體ぶつた口吻は、たまらないほど愚劣である。

「わかる」「わからない」といふ言葉を、もつとも嚴密な意味で使用すれば、世の中に「わかる」ものなどは何一つあるべき筈はない。支那人だけが分らないやうなことをいふが、それならその連中に、日本人のことが分つてゐるのかと問ひ返したい。それよりは各自自分の了簡がわからぬ、といつた方がより正直で正確ではないか。

しかし、そこまではなくつても、常識的な意味で、支那人ぐらゐが、さうむづかしいわからない民族だとは思はれないのである。簡単に考へばいゝものを、好き好んで複雑に、むづかしいものにしてコネクリまはしてゐるのは、つまらない話である。もちろん支那人の研究は、今後とも、多くの人々が、あらゆる角度から分析を深めて行かなければならない。しかし、それが決してマスターし得ないほど、至難なものだなどと、對象にのまれてしまつてはならない。

もしも、我々日本人の心理的分析力が、支那人を克服出来ないとあつては、それはもう今後、

23

日本人は支那人に何もしかけるなど云ふのも同じことである。

なぜなら、了解のわからない相手と組んで、利のあるわけが絶対にならぬからだ。

しかし、日本人は、戦争でばかり、支那人より強いのではないのだ。頭脳の鋭さにおいても、たしかに我々は、彼等より一枚うは手だと自信してよいのである。

これまでの日本の一般民衆のやうに、支那人を頭ごなしにチヤンコロと輕蔑してゐたのも間ちがつてゐる。しかし日本の知識階級は（その中には私自身をふくめて）これまで、いさゝか支那人を買ひ取りすぎてゐたことも、ソロ／＼氣がつかなければなるまい。

## 2 没落し果てたる舊家の子

心のどこか奥底に、支那人に對する崇拜の念をひそめてゐるものでなければ、眞正な日本のインテリゲンチヤと云ふ事は出來ない。我々は、明治以來、あまりにも泰西文明によつて支配されて來たがために、意識面においては、ほとんど支那などを問題にしないやうに考へてゐるが、實際に我々の無意識下に沈んだ崇拜の念は、先祖傳來の容易に抜きがたいものがあるのである。

そのことは、今日ヂヤアナリズムの上で、支那人のかいたものといへば、随分つまらないもの

24

でも、過大評價されるやうな傾向によくあらはれてゐる。

たとへば、前の北京大學に胡適といふたいしてえらくもない學者がゐた。ところが支那文化にかかはりを持つほどの日本人の、この胡適先生に對する買ひかぶりといふものは、實に馬鹿々々しいものがあつた。北京に行くほどのものは、みんな胡適に會談して來ることを、何か特殊な名譽のごとく語りあつた。

この胡適は、英語が少し達者にしやべれるといふだけの男で、そのかいたものは生ぬるくて、私など、讀むに堪へぬと思つてゐる。彼は、アメリカあたりへ行くと、チンコロが貴婦人に可愛がられるやうに愛玩されるので、多少は得意ないゝ氣もちになるが、しかしアメリカ人が本當に彼を尊敬してゐるのでも何でもないことは、さすがに氣がついてゐるために、結局は鬱鬱でありそのうはべの親米ぶりにもかゝらず、心の底ではアメリカを憎んでゐるといふつまらん男なのである。

こんなシロモノを日本人が一時どうしてあんなに有難がつたかといふと、結局は支那人の傳統的文化的の光暈が、日本人の耳目を幻惑せしめること、あまりに大きいためと考へるより外はない。

25

日本の思想的知識人にして、論語や老子やその他の漢籍の感化を蒙らず、これに畏敬の念をいだかないものはあるまい。そして、かゝる偉大な古典を生み出した民族の後裔としての支那人に我々は一種の無意識的自卑感を捨て切り得てゐないことを、ハッキリ認めねばならない。

貴族の後裔といへば、それがどんな腐り切つた馬鹿者でも、一應はこれに注意をむけて、何か偉さうなものを嗅き出さうとする本能的傾向を、我々は持つものだ。日本のインテリゲンチヤの支那人に對する買ひかぶりの中には、かういふ種類の氣分が相當に根強くひそんでゐる。

たしかに支那人は、或る時代には高度の文化に到達した地球上稀に見る偉大な民族であつた。これを否定することは出来ない。

支那へ行つてみると、我々は彼等の人相のいゝのに驚かされる。洋車夫などの中にすら、まるで佛像のやうな圓滿な相をしたものがある。田舎の町を歩いてゐても、何の教養もなささうな娘にして、實に内面的氣品の盛り上つた容貌をしてゐるものに出會つて、眼を見はらされることがある。これこそ、遠くして深い傳統を持つ民族の明白な證據だ。エスキモーやホツチントットの中には、かういふ現象は絶対に見られるものではあるまい。

何と云つても、彼等は、家柄の高い舊家の後裔たることに、間ちがひはないのである。

26

しかもこの舊家は、散々に没落した舊家なのである。有史以來、國を失ふこと兩三度、そのたびに體面も誇りも、泥にまみれ、散々に汚され、踏みにぢられた苦々しい恥かしい記憶を、いつばい背負ひこんでゐるところの子孫なのである。

この歴史的事實が、今日の彼等の性格を決定する樞軸的要素をなしてゐることを、見落してはならない。

かくて、彼等は、性格のどこかに、高貴なものを宿しながら、一面には、ネヂケテ、ヒガンで、陰性で、被虐的で、二筋縄や三筋縄ではいかない厄介なシロモノになつてしまつたのだ。

しかし、それは單にそれだけのものである。何にも恐るゝところも、複雑なことも、むづかしいことも少しもありはしないのだ。

大局において、彼等は老廢して行く民族にすぎない。我々の畏敬する古代支那人と、今の支那人は、似ても似つかないものなのである。

### 3 遂に救ひ難き自惚れ根性

高貴の家柄から没落したものゝ共通的な性格の一つは、その如何ともしがたい現實から遊離し、

27

だ。これに対して白いシーツが衛生的だとか、ラヂオ体操がどうだとか、おためぐかしの親切な  
んか、ウルサがられるだけの話である。

支那人は、残忍性も獍猛だし、復讐心も強烈だが、實にまた親切な性質をも持つてゐる。

しかし日本人の親切と、支那人の親切とは、その出て来る感情の基調が全くちがふのだから、ヘタにかゝりはりあふことは、却て後日の仇や恨みになることも多いであらう。

以上、私はいさゝか、餘りむき出しに語りすぎたやうだ。しかし表面的には、百千の外交辭令も、文化工作も、宗教的運動も、結構なことだし、またやらざるを得ない事は知つてゐる。たゞそんなものゝ効果を、過大評價して、自らそれに酔つてしまつては困るといふのである。

要するに、何より大切なのは、ブッキラ樺な事務家的常識と、實力の正確な計算を以て、ピシ  
リ／＼急所を抑へて行くことだ。

それより以上に大切なのは、日本人の氣魄である。從來の阿呆らしい買ひ被りを一擲して、支  
那人なんぞ、頭からのんでかゝる意氣である。それがなければ、すべての思慮も空しい。

## 大陸的新日本人を論ず

私に一つの空想がある。不可能な空想ではないが、至難な空想なのである。全支那、全滿洲の  
山々に、大植林をすることがそれだ。

赤秃け坊主の山は、朝鮮ばかりの特産かと思つてゐたら、支那はもつとひどい。飛行機で、飛  
びまはつてみると、山々は、まるで馬糞を積み重ねたやうにしか見えない。それはまた、皺だら  
けの象の脊中みたいで、地球が皮膚病にかゝつてゐるやうな感じでもある。

その上おまけに、至るところいたつて水に乏しい。

水が豊富で美しく、いかなる山脈も鬱蒼として、森林地帯をなしてゐる日本に生れたもの  
には、何と云つても支那は住みづらい、情ない土地である。

日本人を支那へ移住させるには、まつ山へ樹を植ゑてかゝらねばならないと、私は、いかにも  
文學者らしい、迂遠な机上の空想に耽つたものである。

いたるところの山に樹が生えれば、水の質もいくらかゞゞ違つて来るだらうし、季候や湿度な

ども、いくぶんかつ中和されることであらう。

それから、支那は、あまりにだぶつびろすぎるから、却つて支配しにくい。現在の三分の二ぐらゐの面積にしたら、もうすこし支配し易くなりはせぬか。それには揚子江や黄河の水をせきとめて、現在の支那の三分の一ぐらゐを水の底にしてしまふのも一つの案である。

さうすれば、水運の便もひらけ、山々の緑は湖面に反映して、日本人にも住み心地のよい、新理想郷が出現するだらう。

いつたい支那の山には、大昔からあんなに樹がなかつたのであらうか。いたるところに石炭が發掘されるところから考へてみても、それは信じられない話である。昔は、どえらい森林が、支那いたるところにあつたものに違ひない。それが、いつ頃から、あんな赤秃け坊主になつたのだらうと、私は、いたるところで聞いてまはつたが、眼の前の政治や經濟のことには眼の色をかへてゐても、誰ひとりそんな悠久な閑つぶしに心を勞してゐる閑人には會へなかつた。

たゞ、ひとつの傳説だけは耳にした。秦の始皇帝が、萬里の長城を築くのに、煉瓦を焼かねばならなかつた。その煉瓦焼きの燃料として、支那中の山の樹を、全部切つて焼いてしまつたのだといふのである。

42

たしかに、あれだけの煉瓦を焼くのなら、たいした燃料が必要だつたのに相違ない。今の學者が計算すれば、何千何萬億石ぐらゐの材木が必要であつたか、易々と算出することが出来るであらう。これが事實であつても、なくつても、とにかく一つの象徴的な物語としても面白い。

すくなくも、始皇帝の大濫伐によつて、たゞでさへ樹木に乏しかつた山々が、徹底的に秃け坊主になつてしまつたのだらうとは、容易にうなづける話だ。その結果として、支那には、洪水がふえたであらうし、悪い病氣がはやり出したらうし、季候が變化したであらうことも、容易に想像することが出来る。

私は、文献的にも、また科學的にも、これを證明する力を持つてゐないが、近代の支那人が人間的にも墮落し、精力を失つて來て、次第次第に落伍者の群に入りつゝあるのは、支那の山に、樹木がなくなつたのが、いちばん大きな原因の一つではあるまいかと、直覺してゐるものなのである。即ち、春秋の筆法をもつてすれば、支那を滅ぼすものは、秦の始皇帝の近視眼的政略であつたとも云へないことがない。

それはそれで別問題とするも、いつれにせよ、現實の支那は、今日のやうな氣候風土の大陸になつてしまつた。

43

私のやうに、ソレ支那を緑化せよの、あの半分を湖にしろのと云つて、騒ぎたてゝみたところ  
で、それが實現するのは、何千何百年先のことかわかりはしない。

そこで現實の日本人は、現實のかくある支那大陸へ渡つて、それに適應して住むより外はない。  
ところが、あの風土の影響力といふものは、測り知る事の出來ないほど絶大なものなのである。

現在の支那人は、あの風土の影響の下に、現在のごとき支那人になつたのだ。そこへ、まるで  
大海の中へ、ひとつかみの粟でもふりまくやうに、僅少な日本人がはひりこんだところで、たも  
まちにして、その風土と、支那人社會の強烈な同化力に征服されてしまつて、何等のアクティヴ  
な支配力を振へなくなつてしまふのが、當然と考へてよいであらう。

支那人の同化力の強さ、といふことについては、事情に適するものゝ、常に驚歎してやまない  
現象の一つである。

倭寇が或る都市を攻略し、その土地の男子全部を殺戮し、残つた女たちを妻として、その土地  
に定住してみても、百年もすぎてしまへば、日本語も、日本の習慣も、跡片もなく消え去つてし  
まつてゐる。

日本人の男にしても、支那人の妻を持つものは（これは例がすくないが）必ず支那風に同化さ

44

れる。

日本人の女にして、支那人の男を良人にするものも、ほとんどそのすべては、生活やものゝ考  
へ方において、支那化するのを常とする。日本人と支那人の間に出來た子供たちは、たいがい日  
本を厭ひ、支那を愛する傾向がある。北京で名を知られた某文化人が、日本人の妻に生ませた娘  
で、ひどい日本嫌ひのあるのは、有名な話だ。

いつたいこの牽引力は何であらう。私は、やはり季候風土をベツクとする兩國人間の氣質的相  
違が、主要なものだらうと考へてゐる。

別に支那人と結婚しないでも、支那へ行つて、十年も二十年も支那人の間に扱まつてゐれば、  
たいがいその性格も顔つきも支那化してしまふ。これは、分り切つた當然の話。一定の氣圍氣の  
中に、一定の着物を着て、一定の食事をしてゐれば、誰だつて、たいがい似かよつて來るもので  
ある。

この最も簡單明瞭な事實を、見落して、日本人といふものは、支那に定住すること二十年でも  
三十年でも、自分たちと全く同じやうな丁簡である、といふやうに考へてゐるのが、そもそもこ  
れまでの我々の錯覺の一つであつた。

45

兩親とも日本人であるながら、支那、滿洲に生れ、まだ一度も日本を見たことがないといふ大陸二世といふものも、近頃は相當にふえて來た。彼等はみな、その心の底に、それぞれに悩みを持つてゐる。日本にひきつけられながら、やはり、日本が自分たちを容れにくいといふ關係で、日本に對して、一種の反撥さへひそめてゐるものがすくなくない。

私は、いつか北京で、どうも支那人は素質の劣等な人間の數が多すぎる。これを半數ぐらゐまでにする方法はないものだらうか、と放言したら、キラリ眼を光らせ、血液を逆流させたやうな顔つきをした日本人がゐた。それは、人情の深い、立派な性格の人物だったが、支那に二十何年も住んでゐて、支那人にすっかり血肉感のやうなものをすらいだいてゐるらしかつた。

もちろん、前記の私の放言のやうな、慘虐非人道な暴言を吐けば、日本内地のインテリゲンチヤたちでも、私に對して憎悪と嫌悪を感じるのは當然であらう。しかし彼等の感じ方と、支那に滞留久しい前記の人物との感じ方の間には、その性質に非常な差別があることを、私は見落すことが出来なかつた。

日本内地のインテリゲンチヤの、支那人に對する浪漫的な好意とか同情とかいふものは、すこしもアテにならないものである。私はそんなものを重要視する氣にはなれない。

46

彼等は、本當の支那人を知つてゐるわけではないのだから、本當の意味では、支那人を愛してもゐなければ、憎んでもゐないのだ。

いよいよ自分でその場にぶつかつてみれば、どんな音を吹くか、知れたものではない。

しかし、支那在留の日本人の支那化といふことについては、相當にシリアスに考へざるを得ないのである。

日本の腕のきいた建具職人などを、支那へ呼びよせても、二三年もすると、たちまち腕が鈍つて、怠けものになつてしまふ。いつたい支那人の怠け癖といふものは、大變なもので、その怠け方からして、日本人の怠け方とちがふ。日本人が自分の職業を怠ける時は、たいがい外の道樂でもやつてゐるのだが、支那人の場合には、ボンヤリと、腕をくんで、妄想に耽つてゐるだけだ。

雇人なんか、半日ぐらゐ何にもせず、門の前に架立つて往來を眺めてゐる。紡績工場の労働者連さへ、チャンと晝寝をするといふことを、私は、片倉製絲の重役から聞いた。やらせれば、日本人並に出来ないことはないのだが、やらないのである。賃銀をよけいにやると云つても、いくら賃銀を貰つても、身體をこわしてはつまらない、と云つて、グウグウ晝寝をするさうである。

日本人の労働者でも、支那にしばらくゐると、次第にさうなつて來るさうである。

47

これは、周囲の生活環境の問題でもあれば、同時に風土の影響でもあり、絶対に免れないところなのであろう。

ところが支那に十五年、二十年と住んでゐて、絶対に支那化せず、日本的スピリットを持ちつづけてゐられる人物が、全く絶無ではない。私は、かういふ人物を数人知つてゐるために、將來の大陸新日本人の典型を、まづそこらあたりにもとめたい氣もちの切なるものがある。

しかしながら實際は、此等は稀な天才的人物にのみ可能なのであつて、大多數者には、決して望まれることではない。

それ故、現實的な大陸新日本人といふものを考へると、やはり支那に住みついて、いくぶんかづゝ支那風に同化されて行くものとして考へなければならない。

日本人が支那へ行くと、たいがい日本人は日本人だけで固つてしまふ。従つて、いつまでたつても、支那語を十分に覺えることが出来ない。支那人と交渉しなくつても、生活上に差しつかえないやうな機構をこしらへて、その中にもぐつてゐるのだから、支那人とは朝晩の挨拶とか、簡単な日用會話で事がすみ、さらに深く心をうちあけて交際するといふやうなところまでは、容易にすゝまない。考へやうによれば、これだから、よかつたのである。もしこれがべらべらにな

48

つた日本人が、支那大衆の間にとりまかれたら、たちまちのうちに骨抜きにされてしまつたことであらう。

49

日本人にして、個人としての性格の力も強く、たつた一人で、支那人の間に、どんどんはひつて行つた人間も、私は、いくぶんかは見てゐる。それでゐながら、本當に日本人らしさを失はず、支那人を批判的に眺め、同時に日本人といふものをも嚴格に批判出来るやうなのは、前にのべた通り、寥々たるものである。

大部分は、半支那人半日本人といふものになつてしまふ。

會つて、多少左翼的色彩をおびて、支那内地へもぐつたものが、今では、情勢の變化に制壓せられて、足踏みしてゐるやうな日本人も相當にゐるやうだ。彼等は、今では、その生活の糧として、多年支那に生活してゐたことの智識、即ち、その情報を供給することを、唯一の生きる業としてゐる。かういふ人間を見ると、その容貌から、實に陰鬱で、感じが地獄的だ。誰に對しても、決して腹の底をうち明けようとはしない。また、うち明けることも出来ない。心の底では、やはり古い運動の夢が醒め切れず、同時に支那人をも愛してゐる。それでゐて、その愛する支那人を裏切るやうな立場を、キツパリ捨て去る事も出来ない。これは、大陸において、これまでは

比較的に新しかったが、現在では、完全に過去のものとなつてしまつた日本人の古い型である。

支那へ行つたものは、最初の半年か一年の間には、すっかり支那に惚れてしまふのが常のやうである。支那人は、あたりが柔かくつて、ニコニコ顔で、實に大きいゆつたりしたところがある。日本内地のコセコセした生活にくさり切つてゐたものは、かういふ人種に接して、始めてホツと魂が解放されたやうで、遮二無二に支那人が好きになつてしまふのである。しかしながら、もうしばらく長く滞留すると、支那人の表面的のニコニコ顔や、素直で禮儀の正しい態度にかゝらず、ひとたび現實問題に對する時にしめず、日本人など足許にもよれないチャツカリさや、頑強さにぶつかると、また何となく厭になつて來る。

この感情のデグザクは、支那へ滞留する多くの日本人の、経験するところではないかと思はれる。

私は、去年の夏、一ヶ月ほど滿洲を歩いてまはり、また秋から三ヶ月ほど北支から中支へと歩いた。この短かい期間に、急速にこの心理的波動を通過したのである。

北京に滞在中など、私は、その一切のものに心酔したやうに、あらゆる支那的なものに感溺した。その瞬間にも、決して批判性を失ふことのなかつた私は、自ら戯れに、これを種痘瘡と

50

呼んだ。どうせわれわれ文化人が支那へ行けば、いちどは支那中毒にかゝらねばならないにきまつてゐる。それを、なるたけ短期に、且つ輕症に通過してしまふために、一度は、自分の身を、たつぷりと、首許まで支那陶醉に浸らせてしまふことが必要なのである。

ところが、人の性格によつては、この中毒から、永遠に醒め切れないものがある。

日本から行つた青年の中にも、何から何まで支那人のことに感心しきつて、これを褒めちぎり、あらゆる點で辯護をする人もすくなくはない。

上海でも、いちどさういふ経験があつた。支那軍が上海に敗れ、南京が陥つたことさへも、その人は、好意的に考へ、あらゆる點で支那を褒めるのである。これに對して、私は、支那人を罵倒して、しばらくいがみあつた。

その後、私は、その他の友人二三と、ビールをのみながら、かうたづねてみた。

「さつき、彼は、あんなに支那人を賞讃し、僕は、一悪口を散々云つたけれど、本當の心の底では、どつちが支那人を餘計に好いてゐるだらう。何だか、彼は本當に支那人を好いてゐるやうには見えないぢやないか。或は僕の方が餘計に好いてゐるかも知れないね」

「その通りだ。彼は支那人をあんなにほめちぎつたつて、ちつとも理解してゐやしない。みんな

51

うはの空なんだ」

私は、この判断を本當だと思ふ。多くの支那中毒者は、實に他愛のないもので、どつち認識不足の高慢などこゝろさへあるものだ。

私が曾て、支那人は日本人と差別待遇しなければならん、といふ意見を、端的に新聞紙上に発表した時に、日本のインテリに異常なショックを興へた。杉山もそんなことを云ひ出すやうになつては、頭腦がどうかしたんぢやないかと云ふのである。

しかし、支那へ行つて、實際の現實を見て來ると、これこそ一切のものゝ第一原理だといふことに、氣がつかねばならない筈である。

昭和製鋼所あたりでも、支那人労働者と日本人労働者とでは、同じ労働に對して、拂ふ賃銀が違ふ。即ち、日本人には高く、支那人には安い。農事試験場などへ行つてみても、同じ事實がたしかめられた。

内地のインテリ的常識を持つて行つた私は、最初はこの事實に困惑させられ、悩まされた。しかし今では、もしさうしなければ、日本人の大陸進出は絶対に不可能であることがハッキリわかつたので、これはこれでよいと信するやうになつた。

52

我々は、自分を胡魔化したり、カモフラージュしたり、偽善者になつたりしてはならぬ。

日本人が大陸へ進出するのは、日本人第一主義によつてである。決して支那人第一主義によるものではない。それ故に、すべてのことは、日本人の都合によつて決定せらるべきであり、支那人の都合は第二の後廻しにされるべきものである。我々は、決して支那人の都合を認めないわけではない。大いにその立場を認めてやりたい。出来ることなら、毎日ピフテキでも喰はせてやりたい。しかし、それはまづ日本人が、毎日ピフテキがたべられる様になつてから後の事である。

將來大陸へ進出する日本人は、まづ第一に、この點をハッキリ念頭においてもらはねばならぬ。決して、中途半端な公平ぶりをふりまはして、事態を混亂に導いてはならぬ。さうして、この原則を認めない支那人に對しては、徹底的に彈壓を加へるより外はない。

支那人は、一面は現實家のやうに見えながら、一面はひどい觀念的な公式家だ。

今日、北支にある相當な地位の支那人すら、日本がいくら日支親善など、口先で云つても、無駄な話だ。日支親善を唱へるなら、まづ滿洲を返還してから後にするがよい、といふやうな文句を並べてゐるさうだ。これは理屈より外には、生きることを知らない。完全な低能兒の言草で

53

ある。現實の問題として、日本が滿洲を返せるものか返せないものか、わかり切つた話である。そんな不可能な云ひがうりをつけて、力味かへつてみたところで、現實はたゞの一步も進歩するものではない。何十年前にすら、孫逸仙は、日本の現實的立場を認識して、滿洲は日本に差し上げて宜しいと、ハッキリ云つてゐたのである。現在においては、事態は、さらに一步進んでゐるのだ。

私は、北支において、いはゆる支那の新政權といふものが出来たのすら、ハッキリしないと思ふ。今日は、すでに辭令外交時代ではないのだ。何よりザツクبرانな率直な行爲時代である。

北支などは、完全に日本の委任統治にして、總督でもおくがよいのだ。もし外交的な問題がウルサイのなら、日本人をドシドシと北支人として歸化せしめて、日本系内閣でも何でもつくるのがよいのである。

現在では、現地ですらすべてが中途半端な感じがする。いはんや、現地から離れたところで、怠慢な觀念的理想に耽つてゐるインテリなどが、現實に即さない、平等論の基準の上に、ブツブツ文句を並べるのは、まことに無理のないところかも知れない。

ところが、かういふ平等論の包懐者が、實際にあたると、案外に不公平な感情家であつたり、

54

胡魔化し屋に陥り易い。それは、實際には不可能なことを、文句の上で唱へてゐるのだから、生活上の胡魔化が生じて來るのは當然な話である。むしろ、日本人と支那人とは差別待遇せよ、大陸では日本人が第一義で、支那人が第二であるといふ原則をハッキリうちたて、おくと、その後の施設に無理がおこらない。従つて、第二義的地位におかれる支那人にとつても、實質的にはその方が、却つてハッキリして有利な場合が多いだらう。

もつとも、支那人は面子をウルサク云ふ人種だから、かういふ原則は、すべての日本人が腹の底へしまつておけばいいので、敢てこれを法律のごとく、條章としてかゝける必要はない。

しかし、これだけの原則をしつかり腹の底からつかめるには、相當な人間的な、或は心理的な鍛錬があるのである。

日本人第一主義だからと云つて、支那へ行つて、無暗に支那人に威張り散らし、無理非道なことをせよ、といふのでは絶対にない。支那人といふものは、あくまでも大事にしなければならない。それは、我々が我々の生活の協同者たる家畜を大切に、愛情の濃かな注意を拂はなければ、結局は自分にも損がいくのと同じことである。いはんや支那人は家畜ではない。萬物の靈長たる人間だ。ものも云ふし、字もかくし、我こそ天下第一の民だといふやうな己惚れすら持つて

55

る。しかし、大事にするにも大事に仕方がある。支那人は一見すれば、實に素直で、柔順で、愛すべき感じがする。だから日本の善良な政治家など、すこしく支那のことにたづさはると、日本人より支那人の方が可愛くなつて来るやうな傾向さへあるのではないかと、疑はれる。ところが、この一見して素直で、柔順な腹の底には、實に頑固きはまる性質をひそめてゐるので、大事にすればするほど、つけ上つて来る猛烈さは無比と云つていい。

日本人は、雑沓の中で、人の足を踏みつければ、どうもすみませんでした、と云つて詫びるのを禮とする。詫びなければ、相手が怒る。詫びてはじめて釋然とする。

ところが、支那人は、人の足を踏んでも、決して謝罪しない。謝罪すれば却つて相手が怒る。この心理状態なんか、到底日本人の常識などでわかるものではない。

もし諸君が支那人に足を踏まれたとする。諸君は、相手が自分の過失を詫びるであらうと期待してゐると、知らん顔をして平然たるものなので、「オイ君はなぜ僕の足を踏んで知らん顔をしてゐるのだ」と詰問したとする。すると、相手は、たいがいこんな返事をしやしないかと思ふ。

「没關心」(構ひません)

構ひません、とはこつちで云ふことなのに、向ふが云つてるのである。この心理的機微は慎重

56

に研究してみる必要があるのだ。

たいがいの日本人は、自分の了簡で支那人をおしはかるが、これが失敗の第一の原因である。

もし將來、日本人にして、支那の官吏の採用試験に應募しようといふものがあるなら、これに次のやうな二つの試験科目をやらせてみる必要があると、私は戯れに語つたことがある。

その一は、まづ支那の女を口説かせてみせること。

その二は、北京の東安市場あたりで骨董品を値切らせてみせること。

この二つの腕前如何によつて、だいたい被試験者が、支那人をどの程度に理解してゐるかが分るだらうと、冗談に話したことがある。そして、この二つともに、實にむづかしい試験問題なのである。勝つたつもりでゐて、實はまんまと負けてゐるのだ。支那の立派な商家へはひりこんで、その娘の養子にもらはれやうとしてゐる日本の青年を見たことがあるが、もう完全に骨抜きにされてゐた。

このやうに、將來の大陸的新日本人の資格として、何よりもまづ支那人を理解するものでなければならぬが、それと同時に、日本及び日本人といふものをハッキリ知つてゐて、失はないものでもなければならぬ。

57

大陸における第二世日本人の頼りなさは、彼等が日本人でありながら、日本といふものを知らないところに歸因する。

日支親善、日支親善と、口先で唱へるのは結構だが、いつの間にか日本が忘れられるのが、その甘い坊ちゃん的理想主義の歸結である。それ故に、私は、無暗に日支親善を唱へて、日本人と支那人との間に結婚が流行するやうなことは、今から、嚴重に警戒しなければならないことと思つてゐる。

大陸における新日本人は、先驅的開拓者だ。それ故に、明晰な、目的意識を把握してゐることを、何より第一の資格と考へねばならぬ。

モルガンの如きは、原始的家族制度の研究のために、土人部落にはいりこんで、土人の娘と結婚までするほどの信用を博した。しかし、それは彼にとっては、あくまでも手段であつた。日本人でも、眞に強烈な性格と、鋭い智力のある人物なら、支那人と結婚しようが何をしようが構はない、と私は思ふ。しかし、そんな人物は、一萬人に一人あるかなしたから、原則としては、支那人とは、或る程度を越えて、近づかない方がいゝのである。また向うでも、決して近づいて來はしない。こつちは、十分に心を許したつもりでも、相手は許してはおらぬ。さういふ點では、

58

支那人の方に性格の深みがある。支那人は、口先で云ふことゝ腹の底は必ずちがつてゐると、罵る人があるが、支那の長い間の政治や環境が彼等をさうさせたゞけだ。さういふ點で、日本人は實に甘すぎる。だから日本人の支那旅行者などは、自分では氣がつかないうちに、十中の七八人までは、スパイによつて利用されてしまふことになる。いはゆるしつかり者の性根が足りないのだ。

59

先日、私が朝日新聞に「支那人を論ず」といふ嚴格な批評を發表したら、一部の日支親善運動をやつてゐる「支那通」が、あんなことをかゝれては、我々の運動の妨害になると云つて、こぼしてゐたさうである。

いくら運動の妨害にならうとも、私の論じたことは本當だから仕方がない。それだけの根本的認識なくして、日支親善をいくら叫ぼうと、結局は何等の効果もないのだから、そんな甘ちよろい運動は、むしろ早くぶつ潰してしまつた方がいゝ。

日支親善は實に望ましいことである。もしそれが實現する日が、近く來ると信じられるなら、想像したゞけで、私の胸は歡喜ではち切れさうになる。

しかしながら、如何に望ましいことであつても、差しあたり、早急に實現出来る筈のないもの

を、出来るつもりで、生ぬるい手段を弄してゐるのは、却つて有害なのである。

日支親善は最高の理想の一つであるが、今のところは、まだまだそんなことを信ずる過程にはいつてはゐない。支那と日本とは、現に喰ふか喰はれるかの大死闘を演じてゐる最中だ。大局の勝負は未だ決定してゐるわけでも何でも無い。

日本人は、口を開けば、時局の重大さはこれからだ、など云つてゐるが、實際にその重大な意味が分つてゐるものがどれだけあるだらう。まだまだ我々は、支那人のことなんぞ、心配してやるだけの身分にはなつてゐない。

將來の、大陸の新日本人のタイプを想像すると、それは、何よりもまづ一個の天才でなければならぬ。それはメフィストフェレスのやうな、悪魔的な智力を具へてゐるとともに、同時に、情熱と、血と涙も必要なのである。

基督が使徒たちを、迫害の眞中につかはしてやる時、鴿のごとくおとなしく、蛇のごとく聴かれ、といふ教訓を興へてゐる。將來大陸へ進出する日本人も、決して安全な地帯へ行くのではない。それこそ蛇よりも聴く、栗鼠よりも素早く、且つ禪僧のごとく意志的でなければならぬ。

日本人の冒險的傾向は、徳川時代の鎖國主義と、明治以來の泰平な社會相の持續のため、現在

69

では非常に稀薄なものになつてしまつてゐるやうだ。

私どもが滿洲あたりから歸つて來ると、會ふ人ごとに、どうだ、うまく行つてるか、馬賊はもう出ないか、などいふ質問をうける。私は、これに對して、冗談云つちや困る。支那は日本とはちがふんだ。馬賊なんか百年たつたつて出て來るさ、それが當然ぢやないか、と云つてやる。

滿洲にはまだ馬賊が出るさうぢやないか、やり方が悪いんだらう、などいまるで滿洲を東京と同じやうに心得てゐる人間が多い。

いつたい日本ぐらゐ、社會的安全率の高いところは、世界にも稀なのではないかと思ふ。それは結構なことではあるが、同時に、そのため、日本人の性格が温室的なものになつてしまつたことは疑へない。疾風に堪えず、白刃の下に堪えないものになつてしまつた。

滿洲から朝鮮へはいると、吻と一息する。それが門司まで來れば、こゝれいものが無くなつたやうな氣がする。こんな安全な國に住みながら、夜に雨戸なんか閉めて寝るのが、滑稽なやうな感じがする。

大陸へ出て行くのは、とにかく冷たい風の中に行くことである。特に、内地の都會の文化生活になぞ馴れてゐるインテリなどは、大陸一般の文化施設の低さに望息しさうになる。どこを見て

61

も、美術館もなければ、図書館もない。ロクな娯居一つ見られるわけでもない。内地でいぢめられてゐるダンスホールが、滿洲北支の方では、大目に保護されてゐるのも、日本在留民たちのあまりの氣の毒さに對する思ひやりからであらう。

しかも、その上に悪いことは、日本人が日本人同恣でいがみあひ、さらに生活を堪えがたくすることである。いつまでも支那語をおぼえず、日本人ばかり固まりあつてゐるため、生活の範圍が狭くなつて、田舎者根性に陥り易い。さうして、たまたまこの仲間からはづれて、單身支那人の群にはいつて行けるだけの性格の力のあるものも、その十中七八は支那人化するの危険に會ふ。

私は、將來の大陸日本人を指導するには、このかゝるかゝるがいはん困難であり、且つ必要なことであらうと思ふ。

何と云つても個人は弱いものである。そのまゝ抛擲しておいてはならない。日本人に對しては、君は日本人の一員だぞといふ自覺を興へるだけの生活條件を興へて、それによつて絶えず心強さを感じさせるやうにしてやらなければならぬ。

外國の宣教師など、日本人も滅多に行かない支那の山奥に、教會を建て、頑張つてゐるのを見

ると、日本人は驚歎する。しかし、彼等は、三年か四年支那の奥地で布教すれば、あと一年か二年は、本國へ歸還して、十分に靜養もさせられるし、自國の大勢や、最近の思想學問に接觸されるだけの機會を興へられるやうになつてゐるのだ。

異常人でもない限り、さうでもしてやらなければ、くさるのが當然の話である。

滿洲あたりにゐる英人は、英本國のことをホームと呼ぶ。さうして、定期的にホームへ歸つてその空氣を吸つて來る。とにかく親近感を、絶えないやうにしてゐるらしい。

私も支那在留の日本青年たちと話す時は、二年か三年に一度は、日本へ歸つて日本の空氣を吸ふことをすゝめて來た。

從來の私どもは、日本人は海外へ出て、すぐ本國へ歸りたがる島國根性で困るなんかと、きいたやうな口を叩いてゐたが、今では、私は、それがむしろ有利な面のあることがわかつた。

大陸へ人間を送つて、送りつばなしではいけないのである。これは、土地に種子をまいて、肥料をやらないのと同じだ。大陸の日本人と、本國との間には、絶えず連絡をたもつて、精神的な血液を間斷なく循環させるやうにするのでなければ、本當でないと考へるやうになつた。植民政策に對する日本人の用意の足りなさは、この面に最も多く曝露してやしないかと考へる。

一般的な弱い個人に、鬼神のやうな性格をもとめてはならない。たまたまその中から、天才的な指導者があらはれるなら、これは別箇の話である。

もし將來、日本の植民政策に破綻が生じるなら、それは日本人が日本人を愛さないところに起因するのではないかと思はれる。

たとへば、日本人の大企業が起れば、日本人の小企業を壓迫し、且つこれを輕蔑する。このことは、私は今度支那へ行く前から氣がついてゐた。二千圓三千圓といふやうな小資本を持つて出かける人間を、いちばん大切に保護しなければならん、といふことを、いたるところ會ふ人ごとに論じて來たのである。

日本人は、近年の泰平に馴れて、いくぶん冒險心を稀薄化されてゐるが、決してこれを失つてゐるわけではない。

希望の目標さへ與へてやれば、猛烈な冒險心を噴出する能力のある民族であることを、私は今度、幾多の事例を見て痛感した。

上海に慶應出身のIといふ青年がある。髪を綺麗にわけて、新しいペンケチを胸のポケットにはさんで歩いてゐる姿なんぞ、どう見ても單なるモダン・ボーイにすぎない。英語も支那語も達

64

者に話す。ダンス・ホールなんぞに出入りして、女を扱はせたりすると、實に手に入つたものである。これがナカナカの大膽もので、敗殘兵の出沒する危險な夜道など、ひとりで自動車を操縦して、平氣で走りまはる。蘇州が落ちた時に、二晝夜、飲まず食はずで危險區域を歩き通し、軍の情報より先に、蘇州陥落の確報を持つて來て事情通を驚かさせたのも彼だ。

「あいつ無鐵砲な野郎だナ」

南京の夜道の闇の中に消えて行つた姿を見送つて、私は、心からその體力と膽力に舌を捲いたことがある。かういふのに、しつかりした精神と、イデオロギ―を興へたら、とにかく大陸新日本人の新しいタイプの一つになり得るであらう。

蒙古方面の特務機關などにも、如何にも大膽な性格をあらはす、眼光の炯々たる青年の幾人かを私は見た。彼等はたいがい、常に死地を出沒してゐる。一度捕へられて日本人だといふことが分つたら、生命はその場で失はねばならないやうな領域を、家常茶飯事のやうにして歩きまはつて來る。惜むらくは、彼等に未だ大局を洞察する明識を、十分に養成せしめる暇のないことである。

だから、かういふ人物を、時々、内地に呼び返して、日本及び世界の大局を把握せしめるやう

65

な組織をこしらへてやるのが大切だ。

將來の大陸新日本人は、愛蘭士人がアメリカ大陸に渡つて、アメリカ人になつてしまふやうなものであつてはならないし、又、さうなり切れるものではない。むしろ徹底的に、本國と密接な關係の下に、その性格をつくり上げて行かねばならないものと信ずる。

## 支那人と結婚するな

(支那人の家庭生活について)

國際結婚といふことについて、これまで私の見解は、きはめて無色無頓着の状態にあつた。

自分が目撃したり、かゝはりあつたこともなく、自分自身の判断の下せないやうな問題には、それはいつも私のしめす態度なのである。

國際結婚の可否について、他人からたづねられた場合には、私は、次のやうな答へをするのを常とした。

とにかく結婚といふことは、日本人同志の間にでも、成功させることはむづかしいものである。いはんや、氣質や體力や、經濟的レベルや言語や風習やが、甚だかけ離れてゐる外國人との結婚において、成功するといふことは、並ならない努力を要する至難事であらう。それだけのことを覺悟して、やつて見ようといふほど好きな相手が見つかつたら、やつてみるのもよいだらう。それをしてはならないといふ原則は、私には格別に見あたらぬやうだ。たゞ、實際的に考へる

しても、あなた方は強いですね」

「いえ、私達も、みんな酔つてをります。私達のあるのは三等で、船の一番前の方ですから、トテモ激しく揺れるのです。それでも負傷した兵隊さんたちをお迎へに行くので、この船が大連に着くまでに片づけてゆかなければならない用事がありますから、みんなまるつてしまひながらも仕事をしてゐます」

「仕事つて、どんなことですか」

「名札をこしらへたり、名簿を整理したりいたします」

この日の時化では、船首の方の上下の振幅は七メートルから八メートルあつたといふ話を、私は後で聞いた。つまり、船首の方にある三等客は坐つてゐながら、絶えず二丈以上の幅を上へ下へと揺られてゐるのである。それでゐながら、仕事をつゞけてゐるといふのだから、女も緊張すると、えらいもんだと感じた。門司から、赤十字の看護婦が乗りこんだことは、私も見てゐたが、二等の方に乗つてゐるものだとばかり思つてゐた。それが、三等に乗つてゐるのだといふから、ちよつと打たれた。これが英國やアメリカあたりなら、看護婦などはおそらく二等でもなければ乗るまい。

389

戦地に乗りにこんで行く赤十字の看護婦といふものは、どこか威厳があつて冒しがたいものである。私は、彼女たちが、大連の波止場から、傷病兵を介抱しながら出帆して行く光景をも、たまたま目撃した。

390

青白くやつれて、白い病衣につつまれた負傷兵たちに附添つてゐる看護婦を見ると、さすがに女の有難味といふものが、身に染みる感じのするものである。こつちへ来てみると、女の数が少いだけに、特にさういふ感じを深くするのである。

負傷兵の或る者は、内地へ送り返されるか、或る者は、天津の病院あたりで加療した上に、再び前線に送り出される。

その區別が何によつてつけられるか、私どもには分らないが、おそらく病氣の種類や軽重によるものであらう。

天津の病院あたりで、ほぼ軽快した兵が、再び前線に出るのは、別に附添人や引率者がついてゐるわけではなく、めい／＼、一人々々が、敵の敗残兵の出没する危険な地域を突破して、自分の所屬した部隊を探しながら、後を追ふのである。

だいたいあの邊にゐるといふ見當はついてゐたとしても、部隊は絶えず動いてゐるものである

から、昨日、人から教へられたところへ行つてみても、今日は、そこにあるかあるかないか分らない。それが病後の身で、言葉の通じない不案内の土地を探しまはるのであるから、實に不憫な話と云はなければならない。

しかし、戦争といふものは、もとくその性質からして酷烈なものなのだ。そこでは一切の甘えた気分は許されない。戦争をはじめない時ならイザ知らず、一旦戦争をはじめた以上は、常識的な人情論などは一蹴して、勝利の貫徹に突貫せねばならない。中途半端な人情論を出すと、却て大局を誤るであらう。

しかし、負傷が充分に恢復してゐない兵を、あまり急いで、病院から戦場へ送り出すと、疾患がブリ返して、再び後送されて來たりして、いたづらに軍のエネルギーを消費することになるので、近頃では、退院をさせることに厳格な条件をつけるやうになつて來たさうである。

重傷を負つた兵が、病院を脱出して前線へ向ふ、などといふ新聞の記事が、よくわれくの眼にうつる。勇ましいことではあるが、大勢がそんな真似をしてくれば、軍全體として、却て無用な損害を受けることにならう。

## 事變と日本女性

滿洲や支那で育つた日本人の女は、内地で育つた婦人たちより、比較にならずノンビリしてゐて、明朝だといふことは、百人が百人とも云ふところである。

そのいちばん根本的な原因は、こつちでは、内地のやうに、經濟的なせよこまさがないためと思はれる。

私の知つてゐる或るお嬢さんは、航空會社へタイピストを勤めてゐる。

「月給はいくらですか」と尋ねたら、「いろいろおはせて七十五圓ぐらゐになります」と答へた。それが、未だお勤めに出て半年になるかならない人である。このお嬢さんは、両親は立派に健在してゐて、生活の負擔はまるでなく、もらつた七十五圓は自分の好きに使へるのだから、これではたいがいノンビリもする筈である。

この人はまた、東京へ出て、自活しながら勉強したいといふ希望を私に告げた。私は、笑ひながら云つた。

「まア、行つて御覽なさい。最初からあなたに三十圓の月給を拂つてくれるところが見つかつた

ら、よつぽど成功の部です。その三十圓で、あなたは、部屋代を拂ひ、御飯を食べ、着物も着なければなりません。その上に、勉強する費用がどうして出ますか」

娘さんの眉が曇つた。一瞬間、彼女はこれまで知らなかつた憂鬱さに、とらへられたらしかつた。

しかし、日本の内地の大多數の娘は、年百年中、朝から晩まで、この種の憂鬱にとらへられ通しなのである。これでは、長い間に氣質的な相違の大きなものが出来上るのは、當然な話である。

「戦争の時は、恐ろごさんしたか」

私は、幼い女の子や、男の子や、娘さんたちが、私をとりかこんで食事をしてゐる席上で尋ねた。

「うん、そんなに恐くなかつた。それでも爆弾の落ちる時は、ちつとは恐かつた」

といふのが多くの答へであつた。

弱い女性といふものは、案外に度胸のいふものである。殊によると、通州の人たちと同じ運命に陥るかも知らなかつたやうな場合に、屋上へ上つて、戦争を見物してゐた、といふやうな人

384

も相當にあつた。それは、事態の真相について、無智であるための大膽さでもあるが、しかし現場といふものは、たいがいそんなものである。

「別に恐いと思つたことはありませんでした」と二十歳のお嬢さんが確信的に云つた。

「でも、T子さん、あなた、あの時は相當に悲壯な顔をしてゐましたよ。どうしたら逃げられるだらうかつて云ふやうな」

と、傍から、その母親の人が笑ひながら冷かした。それはフランス租界内の或る家庭の話である。

だいたいにして、十五六歳以上の人たちは、よく自制してゐたさうであるが、十歳から下ぐらゐの子供たちが、銃聲におびえて、恐がつて泣いて困つたさうである。

「私も、冷静を装つてはゐりましたが、内心は悲壯なものでした。もし支那兵が入つて來たら、子供たちだけは、支那兵に殺されないうちに、自分の手で殺してやるだけの覺悟も、一時はしました」

と、その奥さんは語つた。

かういふところに、日本人の共通の感情がある。この氣持は、私たち、日本人にだけ、いちば

385

んよくわかるのである。

私が、天津丸で大連から塘沽までやつて来る途中、夜中に支那婦人の投身自殺があつた。今年生れたばかりの赤ん坊を、ひとり後に残してゐると云ふ。

私は、三等室の方へその子を見に行つた。その子は、黒い服装をした中年の善良さうな支那婦人の手に抱かれて、笑つて、手足をデタバタ動かしてゐた。

その子を見てゐると、涙が出て来る。どうして、この子も、いつしよに抱いて、死んでやらないのだらうと、私は思つた。その子を死の道づれにして殺すより、たつた一人ほつち、もの苦しい世界にとり残して行つた母の方を、ズーツと殘酷にも冷血にも感ずるのが、われ／＼の實感なのである。さういふところにも、支那人と日本人の感情の喰ひちがひがあるやうに思はれる。

生れた時から、支那人の保母に育てられて、日本語より支那語の方をよく話す子供も、日本人の中からは出て来てゐるのである。それでゐながら、日本人の子供と支那人の子供は、仲好しに出来ないといふ。

戦争ごつこの時なども、支那人と日本人は、ハッキリと二組に別れる。日本人の子供五六人で支那人の子供十二三人を相手にして、必ず日本人組の方が勝ち、棒や、竹切れを持つて、支那人

386

側を追ひ散らすさうである。支那人の子供は、だまし撃ちが上手だといふ。何喰はぬ顔をして、泥のこねたなどを、うしろの方へ隠して持つてゐて、いきなりスキを見て、それを叩きつけたりするといふ。

狭い範圍の觀察であるから、どこでもその通りだとは云はれないだらうが、だいたいそれに似通つた、兩者の性情の相違といふものが、あるのではないかと思はれる。

だいたいに於て、こつちに來てゐる人は、女性でも何でも民族意識が鋭くなるやうである。東京あたりの娘は、西洋人崇拜を發揮するものが少くないやうだが、天津の或る娘は、「英語を習ふのも腹立たしくて、厭になりました」と、私に云つた。

天津では、フランス租界でも英國租界でも、日本租界の貧弱なのに比較して、はるかに立派に整頓してゐるので、そのために支那人が日本人の財力を見くびつて輕蔑することは、誰でも知つてゐる。

その英國租界など、最初入つて見る時は、羨敵でいゝやうに思ふが、だん／＼に冷い感じがして行くのが、厭になると云ふ。英國人など、日本の女に對して、英國租界内では決して路をゆづらないといふ。支那兵の天津襲撃の時などは、今に、日本人の奴等がヒドイ目にあふぞ、ザマ見

387

ろ、といふやうな、楽しみにするやうな氣持が、英國人やフランス人一般の間にあつたことは事實である。従つて、今では、居留民の間の感情の、自然にうとくなりつゝあるのも事實のやうである。

西洋人や支那人ばかりが、主になつて行く、英租界にセントアンナといふダンス・ホールがある。そこには、日本人のダンサーがたつた三人あるきりであるが、その一人のダンサーが、西洋人がちよつと彼女に何かしたらしく、ハイヒールで相手の脛を蹴りつけてゐるのを、私は見た。少々荒つぽいけれど、痛快だといふ感じが私の胸をスーッとさせた。食事をしながら、彼女たちは、口をきはめて、西洋人の下品なことを罵つてゐた。

これは、眼界の狭い、感情的な若い女性の感想で、決して客觀的の妥當性のあるものではないが、しかしその云ふところにも、一面の眞實があるのである。

## 支那の女

支那といふ國は男尊女卑の國で、男は金さへあれば、何人の妻も買ふことが出來て、しかもその女たちは、家の奥深く、奴隸のやうに閉ぢこめられ、何等の力もないものだといふ風に、これ

388

まで考へるものが多かつた。

しかし、それは皮相の見解に過ぎず、支那における女の力の強いことは、豫想以上であり、今後は、支那の民衆を相手にする時は、その女性たちの力を動かしてかゝらねばならないことが、私たちに、次第にわかつて來た。

しかしながら、いかに支那の女に働きかけたくつても、支那の女の大多數は、家庭の奥深くひきこもつてゐて、容易に外國人などと接觸することを許されないから、働きかけるにも手段がない。この點をどうしたらよいであらうと、私は、支那人の多く集まつた會食の席上で切り出してみた。

その席上には、劉大同と云つて、韓復榘などの兄貴分にあたり、日本の頭山満みたいな地位にゐる七十歳を超えた長老や、天津における支那市民の間に濶勢力を持つた人々が、集まつてゐた。彼等は、私の質問が通譯されるのを聞くと、みんな手をうつて、哄笑した。

そして、王といふ富豪が、私の質問に答へたのである。

「お話の趣旨は、まことに御尤もである。しかし、差しあたつてのところ、支那婦人に働きかけたいといふ、あなたの御希望は、ほとんど絶望である。なぜなら、支那婦人は、むかしから禮の

389

觀念が強く、到底近いうちに、家庭から解放されて、外國人と直接に接觸する事などは不可能である。しかし、こゝに一つの通路がある。それは、日本の女性が、むしろ進んで、わが國の男性に働きかけ、その手を通じて、支那婦人に結びつき、これを徐々に外部へ導き出すことである」といふのが、王氏の説の要點であつた。

この説を聞くと、客はまた手をうつて、哄笑した。この席上には、相當な長老株がをるので、だいたい老人の集まりと見てよいのだが、この社會的地位のある老人たちが集まつて、酒を飲み談笑する時の態度のハツラツさは、私を驚かせた。

日本の老人などは、みんな泰然と納つたり、妙な老人聲を出して氣どるやうな氣がするが、これ等の支那の老人たちは、まるで青年のやうに、手を振り足で床を踏みつけ、唾をとばして論ずるのである。こんな光景は日本では到底見られないと思つた。支那は老人の國だといふがまた青年の國といふ感じもした。とにかく矛盾にとんだ大きな國である。

この劉大同といふ人などは、七十を越えてゐながら、十七八のお妻を二人も持つてゐるといふ。その精力は日本人には珍しく、しかし支那人の間では珍しいものではないらしい。

すべてが複雑であり、矛盾してをり、分裂してゐる。

たとへば前の男女交際論のごとき、王氏は、支那の婦人を、一般に非常に禮儀の正しい舊式なものやうに語つたが、決してそれが全部ではない。

一部には、家庭から解放され、斷髮して驅けずり廻つてゐるやうな女が、決してすくなくはない。

その連中の無鐵砲さは、顔負けするほどで、日本人の家庭を訪問して來て、日本の女は古くさくて駄目だと、攻撃するさうである。

さうして、人の家へ入つて來て、簞笥の抽斗をあけて、中を見たり、臺所へ行つて、鍋の蓋をとつて中を覗いて見たり、その圖々しさは、到底日本の女には眞似も出来ないことがあるさうだ。

要するに、支那に於ては、たつた一つの面を見て、性急に判断を下すときは、最もつゝしまねばならないところであらう。

## 北 京 通 信

北京へ着いてからもう一週間以上になる。

すっかり、北京的にノビてしまつて、何をするのも厭だ。ものをかくのも厭だし、ものを讀むのも厭だ。たゞ、ブラブラと遊んでゐたい。

こんないゝ都會へやつて来て、仕事をするなどといふことは、何だか幾聞しい感じさへする。しかし、そんなことを云つてはをられない身分である。

いやいやながら、原稿紙にむかつてみるが、心は上の空で、早く一段落つけて、表へ出たくつて、ウツウツしてゐる。

私は、内地にゐる頃は、約束通りデヤアナリズムの注文に正確に應じるといふ點で、重寶に思はれてゐた文筆業者の一人であつたらしい。

しかし、今度、支那へ来て、私は、はじめて約束を破つた。四方八方へ不義理だらけとなつた。約束を破つたといふよりは、むしろ忘れてしまつてゐるのである。時々、すき間風のやうに

思ひ出して、ヒヤリとする。

それほど、私は、支那に吸収せられてゐるのかも知れない。眼の前に見聞する以外のことは、何にも興味がない。

支那へ来て、内地の新聞や雑誌を見たがる、といふ氣もちも、私にはまるでおこらない。汽車の中で、つまらない通俗小説などを讀んでゐる人間を見ると、これほど立派を御馳走が眼の前にあるのを見むきもせず、汚ないボロ屑をしゃぶつてゐる馬鹿者として、氣の毒に見える。

日本にゐて、消費階級の心理の分析者であつた私は、この土地でもまた、主としてその方面に興味をそゝがれるのである。

政治や經濟に對する私の感興は、決して第一義的なものでないことが、こゝに来てハッキリとわかつたのである。

張家口から、大同、綏遠、包頭と歩きまはつて、行く先々の、特務機關や、自治會や、司令部やらを、私は訪問した。

これは同行の大朝社の經濟部員、和田氏が研究心に燃えてゐるために、むしろそれにひきまづられたためと云つてよいであらう。

394

大同の石炭の推定埋藏量がどれだけあつて、山元の値段がどれほどで、特定賃銀がいくらであるなどいふ語を、私はゲンナリした氣もちで聞いているた。

私には、そんな細かいことの必要はない。たゞ、大づかみのことがわかればよいのである。

いはゆる山西の鐵と石炭がどのくらゐあつて、どの程度にまで利用し得るかといふことは、北支資源開發の眼目となつてゐるものである。これに關しても、私は、實にさまざまの角度の違つたインフォメーションに接觸した。極度に悲觀論を唱へるものもあれば、極端な樂觀論を唱へ、まるで寶をザクザク握りしめてゐるやうな氣もちになつてゐる人もある。

そして、おそらく真相は、その中間にあるのであらう。とにかく、そこに何等かの資源のあることは確實だ。しかしこれをものにするには、それだけの手段がいきり、努力がある。それは、それほどに容易なことではない。その容易なことでないことを、今後、やり抜き得るだけの客觀的條件が、日本に具つてゐるか、どうか問題だ。

そして、それは、具つてゐるとも云へないし、具つてゐないとも云ひ切れない。それは、今後の日本人の努力と教智の問題とに屬してゐる。

天才が欲しいといふ感じが痛切におこる。

395

私は今、北京ホテルにゐる。或る新聞記者がやつて来て、ロビーで話してゐるうちに、自分たちなら、こゝへ来て二時間もあれば立派に一日の仕事が出来ると云つた。それほどに、政治、軍事、經濟各方面の人物が、このホテルの廊下をゾロ／＼歩いてゐるのである。

だが、私は、彼等に何等の興味もない。多くの紹介状は机の抽斗にほうりこまれたまゝ、身向きもされない。

私は、彼等の云ふことなぞ聞かなくつても、今後の日本がどう行くか、よくわかつてゐる。

日本人は當分は樂になることは出来ない。あらゆる方面で、能率運動に拍車をかけられることがわかつてゐる。これは、いゝ悪いの問題ではなくて、一種の力學的歸結である。

かうすれば、かうなるといふことが分つてゐる。それをやり出したのだ。やり抜くより外に手段はない。

胸が切ない。

北海公園を歩き、むかしのことを考えると、いくぶん氣が樂になる。

成吉思汗の墓は沙漠に埋められやうとしてゐる。

元の忽必烈の建てた門が、眼の前に見える。袁祖が従者わづか三人に護られて、首を縊つた、梁山のやうな景山も見える。

榮枯盛衰といふことを考えると、一種の平等感が精神を支配して、ニヒリスティックな心の安靜の状態がつづく。

北海公園にある大白塔は、皇城鎮護のために建てられたものだ。その金色の鬼神は、あらゆる妖魘を足下に踏みじつて、今も天の一方をにらんでゐる。しかし、その皇城は、今では多衆の懷古的見世物となつてゐる。如何なる平民も、金を拂へばそこへはひつて行つて、西太后が外賓を引見した殿堂や、皇帝の住居や、妃たちの便所や、洗面器まで、のぞいてまはることが出来るのだ。

物事の如何にうつりかはり行くか、といふことが私の眼にハッキリと映る。しかし、私は、これをどうする力もない。流れを堰きとめる力もなければ、流れを促進させる力もない。

たゞ、傍觀して、分析してゐるだけにすぎない。

眼の前のザラザラした日本人の光景を見ると、蟲酸が走る。何を、騒いでやがるんだ、といふ冷笑を感ずる。

しかし、かく云ふ私もまた、冷笑されるより外ないことを、いちばんよく承知してゐる。  
蒙古で黄河の上流の岸に立つた時、私はかく詠んだ。

はるけくも黄河のふちに立ちながら

原稿料のことを思へり

この歌で、私が、自分の卑少さだけを、自嘲してゐるのだと解されては困る。

私は、私が支那へ来て見た、あらゆる人物を、この歌でひつばたいてゐるのだ。

何々政策、金何億圓、何萬キロの航空路と、口にするところは大きいが、同時に、誰もかれもケチな恩給や、會社の移動や、出張費の胸算用や、情實やについてクヨクヨしてゐるのだ。たゞその程度に大きいか小さいかの區別があるだけにすぎない。

そして、自らその卑少さを氣づかずに、胸をそりかへらせて歩いてゐる人間たちを見るのは、全くたまらないことである。

私も、またその泥濘の中にもがいてゐる。今は、これから脱け出さうとも思はない。それが人生だと思つてゐる。

支那へ来て、いつか「賄賂論」といふものをかいてみたい、といふ氣もちがわたしにおこつ

た。

我々は、賄賂なしには、一日も暮せないやうな氣がする。それを率直に認めるか認めないかは人による。賄賂には、精神的なものもあれば、物質的なものもある。これをいちばん大きな範圍に擴大したのが支那人だ。

賄賂の問題は、人生において、非常に重要な意義を有し、徹底的な研究に値するものである。私は、いつかこれをやらう。

こんなことを考へこんで、私は、北支の政治的工作などいふことに、あまり興味を集中しなくなつたのである。

そして、長椅子に寝ころんで、ウトウトと眠り、並木の陰を散歩したり、夜はダンスに行つたりするのである。

昨夜、私の部屋へ来た支那の娘は、三民主義の歌をうたつた。靜かに歌ひはじめて、次第に調子の高くなつてゐるその歌を聞いてゐると、支那の若いゼネレーションが、どんな共通の理想と夢をかきたてられたか、その心胸が實にしみじみとわかるのである。

それも今は互解した。可哀さうな國民たちよ。抗日といふことは、たしかに爲政者の錯誤であ

つた。その反動が来た。しかし、その反動にはまた反動の来ることを考へておかなければなるまい。

私は、女を膝の上のせ、筆談やら、急造支那語やらをまじへて、時間をつぶした。

かの女の父は、小さな役人で、生きてる頃は、五十元ほどの給料をとり、食つて行くだけのこととは出来たが、いつも家には錢はなかつた。父が死んでからは、自分と母と弟妹たちは、食つて行くことさへ出来なくなつた。やむを得ず、こんなことをして、生活してゐる。とかいて、最後に渡生子と、なぐりがきにかきそへた。

蔣介石や、馮玉祥や、宋哲元やらの名をかき並べて、君は彼等を知つてるか、と問ふと、名前は知つてゐるが見たことはないといふ。彼等が好きか、といふと、仰山な表情をして、頭を横にふつて見せた。そして紙上に次のやうな文句をかけた。

他們的不愛民 害民人害商家

これがこの娘の独自の判断でないことは誰にでも明かだ。日本の宣撫班のスローガンでもそのまゝ鵜のみにして、私たちに迎合するための文句であらうか。或は、實際に、華北の人民のヒソヒソ話のうちに、彼等を單に人民を搾取する厄介な存在にすぎないと見る、古來の自治的氣分の

發露があつて、この娘もそれを片耳にでも挟んでゐたのであらうか。

どつちか分らないが、とにかく三民主義の歌をうたひながら、この娘は口先で蔣介石を罵つてゐる。

まことに、支那人の表向きだけの柔順さは、想像以上である。

しかし、この陰性の抵抗は、私のやうな強體的氣質の人間には、實によくわかる。

支那人は、どんな場合にも、決して自己を失ふことはなるまい。踏みにじられて、悲鳴をあげながら、自己主義は失はず、むしろ優越性をすら感ずることの出来る種族なのである。

私は、或る大きな店で支那服を誂へた。出来上つたら、ホテルへ届けてくれといふと、ホテルへ持参すると雇番やその他エレベーターの男にまでいちいちコミッションをとられるから、その失費に堪えないから、とりに来てもらへないかといふことであつた。遠いところでもないのに、散歩がてらに、とりに行くことを、私は承諾した。

私は、その店で、仕立て上りの支那服を着てみた。そして、鏡を見るために、店の隅の方へ歩いて行つた。(いつたい、支那では旅店でも個人の家でも、店でも、鏡といふものが實にすくない)

多くの店員たちは、すべて微笑して、私の方を眺めてゐた。そして、日本語の話せる店員が云つた。

「支那人とすっかり同じです」

もし、彼等が眞に支那人を卑下して考へてゐるなら、かうしたお世辭を客に對して云はない筈であらう。

私は、支那人に似てゐると云はれることにすこしも厭な氣がしない。むしろいくぶんかは愉快な氣もちさへする。

しかし、天津にゐる或るタイピストは云つた。

「支那服を着た時、よくうつります、ぐらゐのことは云はれて、悪い氣はしませんけれど、支那人みたいだと云はれると、厭な氣がしますわ」

おそらく、こゝに男性と女性の事大主義的感觸の相違があるのであらう。

私は、自分が生粋の日本人であることを、よく知つてゐる。その上に、支那人にも似てゐると云はれることは、私の複雑性に、さらにプラスを加へることになつても、日本人なる自信を、すこしも傷つけられることにならないのである。

私は、支那人と、仲好くなり、うまくやつて行けさうな氣もする。或は、危つかしいやうな氣もちもする。

私たちの持つやうな率直性を、南方の近代的支那人は持ちはじめたやうであるが、北方においては、やはり儀禮に関する慣習が、民衆の間に古い天プラ屋の屋臺に油がしみこんでゐるやうに、しみこんでゐるやうである。

北京の骨董街は、有名なものだ。私もまた、土産ものを買ふために、そこへ行つた。

それ等の店にある十中の七八までニセ物である、といふ豫備知識を、私は持つてゐた。多くの細工物は、日本で製造されてこゝらの店へちらばるのだといふことも私は聞いてゐた。翡翠のごときは、職業人でさへも鑑定をつかないやうな巧妙なものが、硝子でつくられるといふことであつた。

また、本當に立派なものは、店へ並べておくものではない。客が顔馴染みになつて、やうやく信用を得た時に、奥へ請じて、それを見せるのだといふことをも知つてゐた。

もつとも、私たちは奥へ請じられても、金がないから、意味をなさない。そこで、安物で、自分の眼に珍らしくさへあればいゝといふ標準で、若干の土産物をとりのへたのであつた。

私をつれて行つてくれた青年は、曾つて支那の商店へ住みこんでゐたといふ經歷を持つてゐた。その青年が、私のために、品物の値段を値切つてゐてくれるのを、そばで見ると、イライラして来る。

肩を叩いたり、手を握つてみたり、紙幣を出して見せびらかしてみたり、見當をつけた當の品物にはすこしも眼をくれず、外の品物をいつまでもブラブラ眺めてまはつたり、實に技巧のかぎりをつくすのである。

支那人には、たしかに、かういふ面倒くさい手を用ひねばならないところがある。

同時に、もつと端的に行く路も、あるのではないか。

宋哲元や、閻錫山や、韓復榘を相手に、すべてこれまでやりそくなつて來てゐるのは、支那人の技巧に到底及ばない技巧を、時々、中途半端に、日本人が用ひるためではないか、とも思はれる。

私の支那服には八十元を拂つた。支那服といふものは安いもので、そんなペラポ一な値はないと、或る人に云はれた時、私は、しまった、やられたかなと思つた。しかし、後にその人は現物を見て、これなら支那服として最高級のものであり、決して高くはないと云つた。

404

私は、店の云ひ値をちよつと値切つてみたが、相手に一つ首を横にふられると、そのまゝ云ひ値通りにあつらへたのである。無用な押問答をはぶいて、騙されることもなくてすんだのだ。

支那人も、こつちの心もちひとつで、實に簡単に話のまとまることの出来る人種に相違ない。日本の政治家の誰もがまだそのコツを會得してゐないため、今度のやうな悲しいことがおこつた。

405

これからは、支那に関する知識が、頭腦労働者には、一種の財産となり得るにちがひない。支那語に熟達した人は、當分飯の喰ひつぱづればあるまいと、私は或る若い通譯者に語つた。そして、支那語に熟達するといふことさへ、支那人氣質の理解なくしては、深いところへは達し得ないのだ。

骨董街に買ひ物に行くやうに、ニセ物をつかまされはしないかと、怖れはじめたら、無暗に見當つかなくなつて来る。いつたいに掘り出し物をしよう、などいふ丁簡ぐらゐ、間ちがつた話はない。これまでの支那通譯君は、掘り出しものをしようと、小ざかしい手段を考へては繰り返して騙されて來たのである。

當然のものに、當然の値段を拂ふことを建前として行けば、支那人は無暗に人を騙す人種では

ないやうに思ふ。

日本人が北京へ流れこんで来て、暗面子と、洋車夫の値段を、馬鹿々々しくセリ上げた。その點からいふと、鷹揚なものであるが、ホテルのボーイや、ポーターに心づけをやらないことによつて、差引きマイナスになるのである。さうして、彼等はそれだけの損勘定を、必ずどこかで埋めあはせようと、心をくだいてゐる様子を、私は、さまざま目撃した。

彼等の生活の屈伸性は、驚くべきものである。

西太后のやうな豪華な真似をやりかねないものもあれば、土の穴を掘つて、もぐりこむことも可能である。

北京など、こんなにピッタリ商賣があがつて、みんなどうして行くであらうと、不思議でならないが、それでもどうやらやつて行くのだ。乞食と、泥棒と、淫賣婦がふえるといふが、我々外來者の眼には、たいしたことはない。

新聞の社會面記事は、なるだけ刺戟を避けるため、市民的悲劇はつたへられないが、文學者は、これを洞察しなければなるまい。私の眼に彼等は相當にハードな生活に堪えられるやうに見える。日本人は、戦争には勝つてゐても、今後、その點で彼等と根くらべをしなければならぬ別

405

個の條件を與へられてゐる。

永劫の太陽と、空のみがこの鬭争を眺めてゐる。

407

## 支那より歸つて來た男

429

今度の檜舞臺の立役者は、何と云つても軍隊及び軍人だ。しかし、この軍隊及び軍人に對する批評といふことは、現に戦争が進行中には、かくべきではないやうに思ふ。

日本の軍隊の優秀なことは、今度の戦争の結果を見ても明かである。これに對しては、いたるところに讃辭が捧げられてゐる。近頃は、私も、これ等の將卒たちに對し、心から有難う、と云つて、頭をさげられるやうになつた。

しかし、いかに日本の軍隊や軍人といへど、神ではないのだから、どうしても缺陷もあるだらうし、過失も犯すこともないとは云へないであらう。さうした美醜兩面を適確に裁斷し、さらに將來の向上進歩に資するといふことは、望ましいことではある。しかし戦争の繼續してゐる現在では、許されたとしても、しない方がよい。なぜなら、戦鬪といふものは、味方の真相は、あくまで敵に知らしめず、敵の真相は、あらゆる方面に亘つて、これを知ることが勝利に達する大切なことだからである。

但し、これは、批評の没却といふことではない。軍の内部においては、あくまでも徹底的に自己批評はしてもらはねばならない。たゞこれを無暗に公表することは戦争の終るまではひかへた方がいゝかも知れぬ。

何れにせよ、檜舞臺の立役者を、たゞほめ奉るより外はないとすれば、私の様に人をホヌるよりクサす方の好きな人間は、ちよつと手が出せない感じになる。この中心人物を除外して、戦地を語り、支那を語るとすれば、話は自ら肩のこらない事を、しやべくるより外はないのである。

支那から歸つて來た人間は、たいがいホツとして、世の中に日本ほど安住なところはない、といふ感じをしみじみと味ふらしい。

尾崎士郎が支那から歸つて來た時に、「支那から日本に歸つたら寝る時雨戸なんかしめなくつてもいい、といふ氣がする。強盗や追刺に會つたつてこわくない。とにかく言葉が通じるのだからな」と云つてゐるのを聞いたことがある。これは、彼が支那において、絶えず如何に恐怖してゐるたかを自狀するものとして、まことに面白い話である。

程度の多少こそあれ、たしかに誰でも支那へ行くと、日常の警戒心が強くなるやうだ。洋車に

乗つても、どんなところにひつぱりこまれて、どんな眞似をされるかわからないといふやうな感じが、事情に通じないうちは、するものである。だんく眞相がわかつて來ると、世の中に、あの洋車夫といふものぐらひ、去勢された意氣地のない存在はないので、すこしも恐るゝに足らぬことがわかつて來るのである。

洋車夫の中でも、殊にいちばん柔弱でたらしのないのは、北京の洋車夫である。

街を歩いてゐると、まるで蠅のやうに群がつてゐる。それが實にしつこく、車をすくめて、後をつけて來るのである。

私が、支那へ行つて、いちばん先に覺えた言葉は、この洋車夫を追ひはらふための「不要」といふ言葉であつた。「不要々々」と云ひ捨て、ひとり靜かに散歩の氣分でも味はうと思つて行つても、實に驚くべきほどの根氣をもつて、どこまでもうるさくつきまとつて來るのである。

さうなると、短氣な日本人は、たいがいムラ／＼腹が立つて來る。まるで親の仇にでもめぐりあひでもした様に、泣きさうな顔をして、眼をいからせ、「ウルサイツ！ 馬鹿野郎！」と、悲痛な聲を張り上げ、往來の眞中で地團駄を踏むのである。

支那人の方から見ると、この際、日本人が、どうしてあんなに怒るのか、わけがわからないら

しい。自分の方は、たゞ車をすゝめてゐるに過ぎないのではないか。それを日本人は、あんな嘸みつくやうな聲を出して喚きたてるのは、いつたい何といふわからずやの生物だらう、とても考へるらしい。

單に「洋車々々」と嘸きながら、後からついて来て、車をすゝめるのは、まだいゝ方である。二三臺の洋車が競争のやうに走つて来て、人の歩いて行くまん前に梶棒をおろして、道をふさげてしまふやうなことがよくある。私など、そんな時はつひムカツクとして、梶棒を踏み折るかやうに、蹴とばしてやるのである。

支那人に云はせると、どうもさういふ日本人の態度がよくないらしい。梶棒を前におろして道の邪魔をされたら、グルツと廻つて歩いて行けばいゝではないかといふのである。

この日本人の子供つばい短氣さについては、支那人たちは、いちばんよく知つてゐるのである。その癖に、相かはらずしつこくつきまといつて、場合によつてはどしゃりとやられることがある。どうも日本人と支那人は、ウマがあひさうである、あはないところが多い。日本人にむかつ腹を立てさせることにおいて、支那人ほどうまく出来てゐる奴はないと思ふ。

412

第一、北京の洋車夫などといふものは、その風體を見ただけで、ムラ／＼腹が立つて来るやうに出来てゐるから、不思議である。冬になると、綿のむく／＼はひつた汚ない綿袍を、デレリと裾までひきつめて、のそりのそり歩いてゐるのが、いかにも意氣地がなく、痛にさはる。

何だい、車挽きなら車挽きらしく、もすこしキリツとした恰好をしたらどんなものだ、とても怒鳴つてやりたい感じた。

洋車夫が私に興へる醜汚の感じを、私は、分析してみたが、それは彼等が、性的欲望の満足をや、途絶されてゐることから来るらしい。

日本なら、いかなる車挽きでも、男一匹で、場合によつては、カフェーの女給の一人や二人を戀人に持つてやらう、といふくらゐの色氣があるから、氣の張りがちがひ、同じ労働服を着るにしても、着こなすから違ふのである。

ところが、支那では、男の數が絶對的に女より多く、下級の大多數者は女房を持つことなどは、思ひもよらない。その中でも洋車夫なども、最下層の部に屬するから、その性的生活などは、極端に歪められたみじめなものになつてゐる。

私の友人の宅に使はれてゐる阿媽は、友人が支那人の性質を批評して、洋車夫のことに及ぶ

413

と、あれは支那人ではない、別の世界の動物だと、抗議したさうである。

つまり女中階級からさへも、それほどに思はれてゐる最低の労働階級で、今は、反抗するだけの氣力もない。もちろん多数の中だから、悪事を働くだけの「勇氣」のある奴もあるが、だいたにおいて、彼等の性格は、宦官の性格に似かよつて、もつと弱いものを聯想させる。

男でも女でも、正當な性生活を送らない人間は、何となく汚ならしい感じがするものである。處女と云へば、如何にも清淨だが、三十にも四十にもなつて處女だなどといふ人を見ると、私は何か厭らしい感じがする。それはその正當な發達を歪められた、内部の生活を直感するたゞであらう。

正當な性生活を拒絶された洋車夫といふものを見ると、その不幸な生活を、氣の毒に思ひ、同情するより前に、その厭らしさの方が、ツンと私の鼻をついて來るらしい。

この男と女の數の絶對的に違ふなどといふ不幸は、單に階級の不平等などといふことだけでは説明されない、人生の悲劇のひとつである。

同じ洋車夫でも、天津へ來ると北京よりは、もすこしシャンシャンしてある。尻端折りをした車挽きらしい姿で走つてゐた。

414

そして、外國租界内などには相當に日本人に敵意を抱いてゐる者がある。

英租界内で、私が十錢の約束で乗つた車夫に、日本の銀貨を渡すと、日本の金は支那の金よりチープであるから、これではいかん、支那の金をくれと、片言の英語でまくしたて、受けとらない者があつた。

しまひに私も癪に觸つて、金を踏ばたへ叩きつけて、サッサと歩いて行かうとすると、相手はその銀貨を拾つて來て、私の後を追ひかけ、私におしつけて、どうしても支那の金をくれと云ふ。その時、支那の金を持つてゐれば、ウルサイから黙つて渡してやるのだが、生憎持ちあはせてゐないと、相手が如何にも日本の金がチープだといふ口吻が、輕侮をしめしてゐるやうなのが、面憎いのとで、私もイロジになつて、その銀貨をひつたくると、更に遠くの往來に叩きつけてやつた。車夫先生は、またそれを拾つて來て、強情に私の後を追ひかけるといふやうな喜劇を演じたのは、私が天津に着いてから二日目のことであつた。

この二厘か三厘の相違からおこつた、日支經濟大鬭争は、たうとう私の方が強情を張り通したが、いつまでもムシクシヤした、厭な氣もちであつた。

この先生たちの狡猾なことは、底が知れないので、たいがいの旅行者は、最初のうちは、ひど

415

くたまされるのが例である。

私も、最初は、十銭でいところを、五十銭ぐらゐづつとられてゐたが、それくらゐはまだいい方で、相手が勝手がわからない猿鳥と見れば、どんなアグドイほり方でもやるのである。

## 支那の女性

私の支那からの通信に、私がしきりに狹斜の巷に出入りしたことがかいてある。その一方に、私は、また大いに日本の將來を變ふる、切々たる愛國的な文章をかいた。

一部の人は、さうした私を、矛盾してゐると云ひ、また辯舌の使ひわけの出来る人間だと云つて責めたりした。

之は滑稽な幼稚な批難である。私は、今度支那へ行つたたいがいの人間のやつてゐることを、自分も人並にやつたに過ぎない。たゞ彼等は、口を拭いて知らん顔をしてをり、表向は愛國アホパ一で行かうといふのに、私は比較的に正直に、何でもかんでもザックズランに話しただけのことにはすぎない。

いはんや、それは私にとつて、必要な役割なのである。およそ女といふものに喰ひこむのになければ、到底その民族の魂の奥に喰ひこめるものではない。

私は、支那から歸つて来る時、自分は、短日月の滞在としては、たしかに支那人といふもの

を、よく洞察して来たといふ自信をもつて戻つて来たのである。

支那の女と云つても、支那は廣うござんすで、娼婦もあれば貴婦人もあり、百姓娘もあれば、ダンサーもあるといふわけで、到底短い紙上にこれを語りつくすことは出来ない。また、大きな紙面を興へられたところで、私には、それだけの材料もないことを告白するのが、無難なところかも知れない。それ故こゝでは、その簡単なアウトラインだけを語る。

## 南 と 北

支那では、南か北かといふことが、我々の想像にもつかないほど、大事なこととして云ひたてられる。政治的にも經濟的にも、美人の判別においても、南か北か、といふことは重要な問題として、検討されるのである。

南の人間と、北の人間では、容貌から、性質から、言葉までがまるつきりちがふ。

上海に育つた娘が、北京に来て、最初は外國人のやうに言葉が通じないのである。その相違は、青森縣と鹿児島縣どちらの騒ぎではないのだ。

北の人間は、氣質も純朴なところがあり、容貌にも圓味があつて、佛のやうな一種のあたゝか

418

みを具へてゐる。

南の人間は、氣質が激しく、顔も角ばつてをり、美人も南の方に多い。それは近代型の性格的な魅力である。

北京の前門といふところは、狹斜の巷として知られてゐる。そこには、巨軒近い妓樓が軒をつらねてゐるのであるが、店によつて、北方の女をおく家と、南方の女をおく家とハッキリ區別されてゐる。また一軒の店で、北の女と南の女と、ごつちやにおいてあるところもあるが、それでも表の看板を見れば、どの女は南か北かといふことはすぐにわかる。

どの店でも、入口の扉のまはりに、抱えてある藝者の名を、額にしてかゝけてあるのだが、南と北とでは、その額の飾りつけ方からしてまるでちがふ。南の方はサツパリしてゐるが、北の方は、赤や青の房だの玉だので、額のまはりをコツテリと飾りつけてある。

つまり、北のクラシックに對して、南は近代的である。今日の有名な女優や、ダンサーなども、ほとんど南の出身だ。貞操觀念でも、南の方が、ずうつと放縱で、自由である。そして辯舌もたくましく利かん氣だ。何でもないことに、すぐにイキリタチ、女と女が客の見てゐる前で、髪をつがみあつたり、胸を小突きあつたりすることは、すこしも稀ではない。

419

多くの妓樓で、南の女と北の女を別々においてゐるのは、そこに集まる客の種類もちがふのだらうし、また南對北といふ意味で、女たちの間の感情がしつくり行かないところもあるのかも知れない。

或る時、ひとりの女がしきりに他の女を責め罵つてゐるのを見たことがある。どういふ意味のことを云つて怒つてゐるかと思つて友人にたづねてみたら「我々はともに南から來てゐるものだから、お互に助けあふべきではないか。それに、あんな眞似をして、自分の面子を傷つけるのは何事であるか」と云つて相手を責めてゐるのださうであつた。これを見ても、北京に來ても、南の女には南の仲間の連帶意識といふやうなものがあることが、うかゞはれるのである。

南の方の女に、君の生れはどこかとたづねてみると、たいがい蘇州の生れだと答へる。これはたいがい嘘である。蘇州が美人の産地として鳴りひびいてゐるから、自分を客の眼に、より高く評價させるために、そんな嘘を云ふのである。

## 支那服と流行

支那の男の服装は、袖も胸もダブダブして、のつそりした大人型に仕立てられるが、女の方

420

は、洋装のワンピースを長くしたやうなものだから、胸から腰から脚にいたるまで、びつたりと肉體の曲線に沿ふて流れてをり、またその肉體が、脚が長くて、腰から上の姿勢が直立してゐるから、全體のポーズはきはめてスマートな感じがする。

421

むかしは纏足でヨチヨチ歩いて、肉體の一部分でも人に見せるのを恥ぢたのであるが、現在では、若い女は全部が斷髪であり、活潑な娘は腕をまる出しにして外足に歩いて行く姿は、日本の女よりはるかにモダンな感じがする。

殊に若い女の不斷着がいい。藍の木綿の大褂のいくどか水をくゞつて、淺黄いろに褪めかゝつたのをひつかけた娘が、颯爽と街を歩いて行く足どりなど、非常に魅力的なものである。

支那服は、その性質がよく洋服に似てゐるから、あの上にも毛皮を着て、ハイヒールをはいてもよくうつる。普通中流階級の女たちは、支那服の上に、襟に黒い毛皮のついた黒い羅紗の外套を着てゐる。その外套は、全身のもあれば七分コートもある。黒い七分コートの裾から下に、あざやかな支那服の裾の見えるのもいゝ調和である。

これまでの、支那の女の色彩の好みは、赤とか紫とかいふ強烈なものが好まれてゐたことは、よく知られてゐる。今でも田舎などを歩いてゐると、何かのお祝ひにでも出かけるらしい晴着の

娘の、燃えるやうな赤や紫の服を着たのによく會ふものである。

それが近頃では、灰色とか水色とか茶色とかといふやうな、淡い色あひを選択することが、モダンとされて來た。黒は殊に上品な色として好まれてゐるやうである。支那服の美しさは、胸のあたりの飾り紐や、刺繡された高い襟のあたりにあるやうに、私どもは考へてゐたのであるが、近頃では、あんな窮屈な襟の高いのは古風であり、襟の低いのがモダンとされるやうになつて來た。さうした流行は、たいがい上海に發生し、次に天津にうつり、北京へはいちばん後から、はひつて來るらしい。

髪はどんな田舎の百姓娘でも、およそ三十歳以下の女なら、すべて斷髪ならざるはなしである。これは國民政府が斷髪を獎勵した結果であることもちろんだ。

前髪を切つて額へたらずのは、日本の娘たちもやつてゐるが、支那ではあれを簾髪リョウヘといふ。保守的な北京あたりでは、今でも多く見られるが、上海あたりの尖端ガールは、あんなのを古風として、オデコをむき出しにするのをモダンと考へてゐる。すべて映畫の影響であるらしい。

簾髪リョウヘなども、會ふたびに、軽くカールしたり、毛先の曲線を變へてみたり、その日その日のちがつた魅力をしめして、人の心をとらへやうとする心のくつき方は、どこの女性も同じこと

422

である。

従來の女は、大掛オウケの下には、褲子クワンシといはれるズボンをはいてゐた。あの褲子は、縁に刺繡などをして、古風な支那の美しさをしめすものであるが、現代の支那女は、あれを厭つて、長い靴下をまる出しにしてをる。大掛オウケの兩側は、たいがい膝まで裂けてゐるから、ひどいものになると、膝の關節から上の股のあたりまで、歩いてゐる時には見えるものがある。

最初は、あれが異様で、厭らしいと思つてゐたが、見馴れてみると、ナカ／＼活潑なものだといふ感じもして來るのであつた。

423

## 利と形式の國

支那の女と交際する時は、何よりもまづ、形式といふものを絶対に尊敬しなければならない。口説くにしても、形式を踏むといふことが絶対に必要だ。

私の友人は、現代の支那のことを、利と禮の國だと、いみじくも云ひあてたが、私はむしろ、支那は「利と形式の國だ」と云ひたい。

だから、女に對する時も、この「利と形式」といふ事は、一刻も念頭から忘れてはならない。

## 断 想

### 熱 海 に て

流感にかゝつて、後がハッキリせず、熱海へやつて来た。久しぶりで生活の負傷兵といつたやうな氣もちになつて、靜かにベッドへ身體を横たへてゐる。然し負傷兵といへど、あらゆる義務から解放されたわけではない。仕事は、東京から追ひかけて来るのである。

ベッドからかきもの机までの間の二メートルほどの距離を、行つたり來たり往復してゐるうちには、相當にグツタリ疲れて来る。

しかし、負傷したからと云つて、休めるうちは未だいゝ方であらう。負傷の手當さへもしてもらへずに、死ぬまで戦はなければならないやうな時も、いつかはやつて來ないとは云はれない。

何だか、そんな時がだんく近くなつて來たやうな氣がしてならない。

現在の時局の重大さの深度、といふことについて、我々がハッキリした尺度を持つことのむづ

かしいのは悲しいことである。

人々は、必要以上に緊張したり、萎縮したり、してゐるかと思ふと、また實にノンキでありすぎたりするやうに見える。

宣戰の布告なしに、ズリ／＼と深味へはひつて行つた時局の性質は、また國民の氣分にも反映してゐるやうだ。

未熟の興奮とともに、いやにをさまつた冷靜さ、などが、いたるところに雜居して、ひしめいてゐる。

これ等のものを、等質的なものに練り直さないことには、本當に精神的爆發力の強い化學的成分は、出來上らないのではないかと思ふ。やはり、じつくりと國民の理智に訴へて行くより外はない。今後の文化人の任務は重いのである。

## 民族的差別

熱海で讒養してゐると、たまたま北京から、任務を帯びて上京して來た知人が訪ねて來てくれて、一夜を語りあつた。彼は在支二十數年に及ぶ人である。プールのやうな浴槽の中に、湯の量

426

の豊富で、美しく透明な温泉にひたりながら、どうです、久しぶりに支那から歸つて、こんな温泉へつかつた時の感想は、とたづねてみると「こんなところへ支那人を入れたくないナ」といふ考へがいちばんに浮びますね」といふ返事であつた。

427

私たちは哄笑した。これまでの私だつたり、こんな言葉にあんまり好感をいだかなかつたことであらう。しかし、現在では、彼の氣分がよくわかるのである。

支那人に對するインテリ的な、妙な同情心なんか、屁の役にもたつものではない。支那人と日本人は、絶対に差別待遇をしなければならんと、私は考へてゐるのである。

英國人が上海で自分たちの公園に支那人を入れたがらず、あらゆる智慧をしぼつてゐる氣もちが今は實によくわかる。

ところで、こゝで眼をちよつと一轉すると、歐米人もまたわれ／＼日本人に對し、それと同じやうな差別感をいだいてゐるやうだが、その方はどう處置したらいいだろう？

わかり切つたことだ。現實を尊重するより外はない。我々の力が足りなくなつて、輕蔑されるなら、それも甘受しよう。

そして、現在は我々を下眼に見おろしてゐる碧眼金髮共を、いつかは眼の下に／＼つくばらせ

て見せるまで、石のやうに黙つて努力し忍耐するより外はない。決して氣短かな、ヒステリカルな叫び聲なんぞあけてはならないのである。

### 高慢な知識階級

近頃の日本のインテリゲンチヤの「良心的」で「左翼的」で「平和的」な連中の多くを見ると、まるで婚期を逸した老嬢のやうな感じがする。

あつてもない、かうでもないと高望みばかりしながら、身の振り方一つ始末することが出来ず、次第に嫉妬深く、ヒステリカルになつて行く。自由奔放に振舞つてゐるとその娘を見ると、これを悪魔のごとく嫉視し、輕蔑し、自分はおんなものと違つてどこまでも貞潔なのだ、といふ觀念によつて自慰してゐるけれど、その貞潔が如何に餘儀なくされた、干からびたお氣の毒なものであるかを、反省する能力もないやうに見える。

それは、現實を直視することをおこたるところから生ずる一種の怠惰である。

私が支那人を差別待遇せよ、と論ずると、彼等は、まるで足を踏まれた犬みたいに跳ね上つて、ワン／＼吠えだてる。

428

そこには、實に世間知らずの、お坊ちゃんらしい善良さとともに、高慢もきさがあるのだ。いつたい、日本及び自分たちが、現在どんな身の上か胸に手をあてて考へてみるがよい。

429

彼等は、まるで兩親の懐都合も知らず、自分はノラクラしながら、慈善家の博愛家のと騒いでゐる、ノッペリした顔つきの息子を私に聯想させる。

ところが、本當の信念があるわけではないのだから、錚せりあひの現實にぶつかれば、直にグンニヤリ變質してしまふのは見えすぎ切つてゐる。「貞潔」を通すのなら「貞潔」を通すでも結構だ。

それならそれだけの用意と覺悟をもつてするがよい。彼等の絶對多數には、それがないのだから虫酸が走る。

### 知識階級を「叱る」

私が、知識階級を「叱つたら、あたかも知識階級を輕蔑してゐるかのやうに受けとつて、いや知識階級は、そんなものぢやない、と有難い説教をしてくれる先生がゐた。

知識階級を非常に重要な社會的要素として認め、これを不當に輕視するものに對し、極力戦つ

て来たのは、そして現在も戦つてゐるのは、私自身のお株のつもりであるところ、その私が百も二百も承知し切つてゐる程度の事實を並べたて、今さらに御説教して下さる一枚うは手の先生があらはれた、といふわけである。結局、私と同じやうなことを云つてゐるのだから、それも結構だ。

しかし私は、知識階級を重要視するが故に、いよくこれを「叱り」つけるものである。その罵倒は、實は、私自身に對する罵倒にすぎないと考へてくれても少しも異存はない。

知識階級は、たしかに行きづまつてゐるし、現實を直視してゐない。それは、私自身についても云へることである。或は、インテリゲンチヤの中に、さうでない人もゐるかも知れぬ。彼等はすでに新しい現實を、正當に認識し、これに對した確な行動をおこし、或は、新しい雄大な理論を建設してゐるのかも知れぬ。

しかし、私の眼にはそれは映らず、私と同じやうに、行きづまつて、現實の直視を避け、しかも高慢を捨て切れぬ多くの人間をのみ見るのである。たゞ私は、今は、それに気がついた。だから喚きたてゝ人々を刺戟したいのである。

その一歩として、まづ敗北主義者を、徹底的な敵として、撲滅することに力をつくすことを決

430

意し、多くのインテリゲンチヤにも、それと同じやうな態度をとられんことを、今後も執拗に、説教せんとするものである。

431

曾ての私は、自分は敗北主義者ではないけれど、なほ敗北主義者の立場にも「理解」を持つだけのリベラルな餘裕があつた。しかし、現在の私は、まづそれから捨てたのだ。それが第一歩なのである。

### 概念的親善論

映畫「東洋平和の道」を見た。最近自分が歩きまはつた大同や張家口や北京などが、實寫されてゐるので、遊覽バスで曾遊の地を、もう一度見物するやうな面白さがあつた。

しかし映畫藝術そのものとしては、すこしも感心しなかつた。殊に、最後の場面で、日支が親善せざるべからざる所以を、家長的な老人のお説教で解決してしまふところなど、文學上ではあれをイージーな概念的的手法と云つて、最も輕蔑するのである。野心的な誠實な藝術家のとるべからざる方法である。たゞ、現在では、あのテーマは少しむつかしすぎるので、あれより外に仕方がなかつたかも知れない、といふ意味で、わづかに大目に見られるであらう。

しかしながら、一步冷静に考へてみると、今日の日本のインテリゲンチヤの日支親善論などは、たいがい、あの程度の概念的な、うすつぺらな領域を出てゐないといふことを考へると、興味がある。

支那人を愛せよとか、日支親善とかを、いくら唱へたところで、具體的な支那及び支那人を知ることなしには意味をなさない。

日本人は偉大であるから、支那人を愛することが出来るなんて、偉さうな文句を並べてゐる者がゐたが、そんな口舌的な寛大さで、問題が解決せられるものなら、誰も苦勞はしまい。しかし、さういふ高慢ちきな人間に限つて、すこし醜惡な現實にぶつかれば、必ず悲鳴をあげるのだ。

憤りことも知らずして、何を愛することが出来るのだ。日支親善も、將來、無限のジグザグの路を、忍耐強く踏んで行くより外はないことを覺悟しなければなるまい。

掲載誌及び年月

戦線から歸つて	東京朝日	昭和十三年一月
歸來感あり	東京朝日	昭和十三年一月
支那人を論ず	東京朝日	昭和十三年三月
大陸的新日本人を論ず	文藝春秋	昭和十三年五月
支那人と結婚するな	主婦之友	昭和十三年三四月
危機における日本の インテリゲンチヤを分析す	改造	昭和十三年四月
ダンヌンツイオと愛國文學者	中央公論	昭和十三年四月
北支行 その一	改造 (臨時號)	昭和十二年十一月
北支行 その二	改造	昭和十二年十二月

蒙古行	改造 (臨時號)	昭和十二年十二月
包頭まで	東京朝日	昭和十二年十一月
北京より	改造	昭和十三年一月
北支より上海—南京へ	改造	昭和十三年二月
南支	改造	昭和十三年三月
天津通信	主婦之友	昭和十三年一月
北京通信	日本評論	昭和十三年一月
支那より歸つて来た男	アサヒグラフ	昭和十三年二月
支那の女性	アサヒグラフ	昭和十三年三月
断想	東京朝日	昭和十三年一月 至同 四月